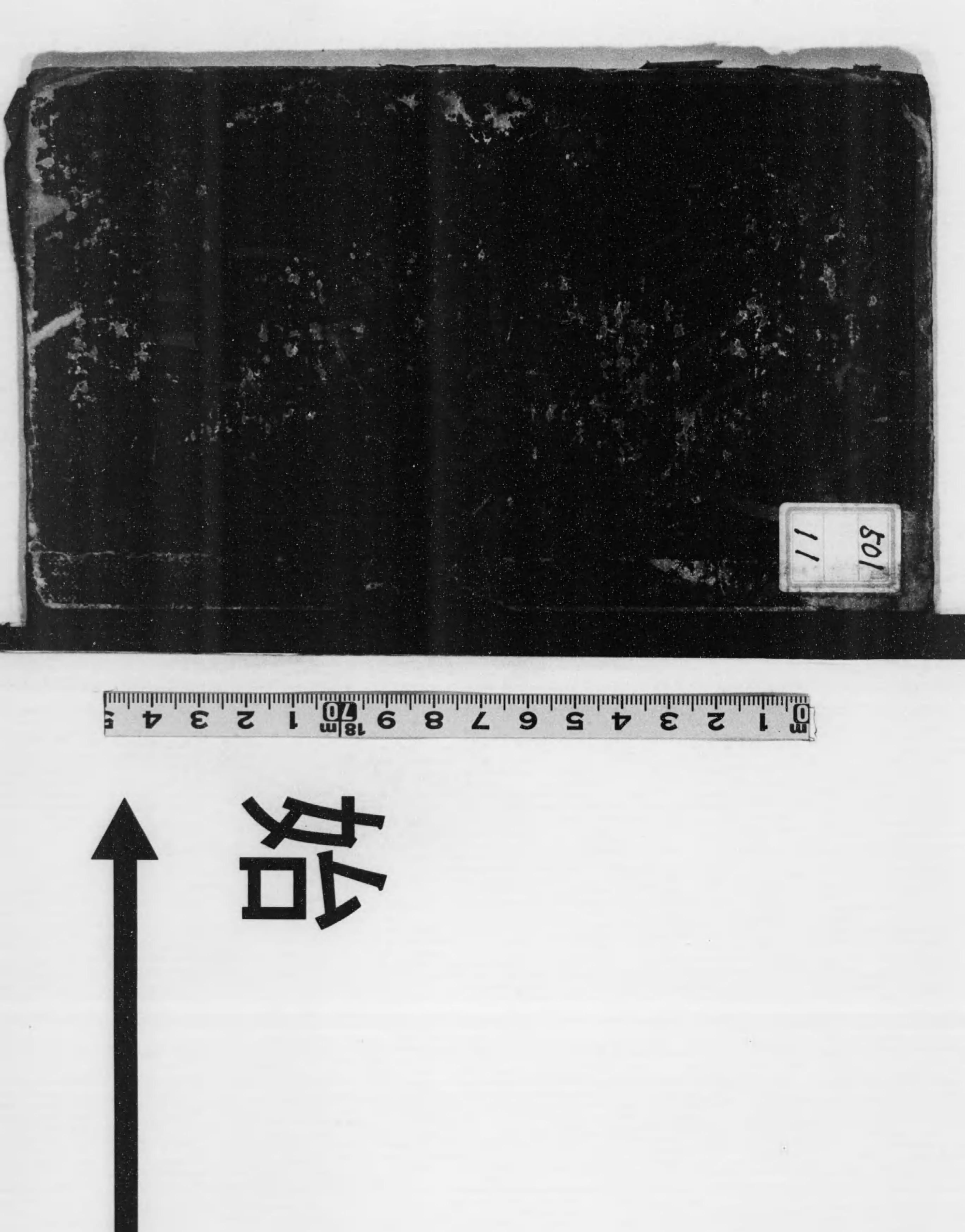

501
11
18
70

501
11

50/2-11

秋田雨雀著

東の子供へ

日本評論社版

大正
10 3.22
内交

東の子供へ　目次

鶴の湯の話……一
王様と子供……一四
少女と鳩……二一
羚羊の話……三六
鷹の御殿……四四
樵夫の娘……五五
幸福の鐘……六九
フロリーズの話……八一
牧神と羊の話……九三
古戦場と柳……一二

王様の翼……一三二
朝鮮人の娘……一三四
パラソル物語……一四六
賢者アリベの話……一六一
飛行機……一七三
旅人と提灯……一八五
鶴と蟹……二〇一
歴制者と犬……二一七

附録

小説 三人の少女……二二八

——（目次終）——

東の子供へ

鶴の湯の話

秋田雨雀著

昔津輕といふ寒い國の山の中に、一つの村がありました。こゝは田畑が少いので村の人達は、大抵は木樵や炭燒を生業として暮して居りました。

この村に仁助といふ男と太作といふ男と二人の人がありました。仁助は馬鹿正直で、何方かといへば頭が少し足りないほどでしたが、その反對に太作

の方は少し恰悧すぎる男で、文字も書ければ理窟もいへるやうな男でした。二人は子供の頃は仲よく遊んだものですが、仁助はあんまり働きのない男なので、いつまでたつても貧乏をしてゐるし、太作の方は讀書きも出來、働きもあるので段々金を殘して二人は今ではもう友達ではなくなりました。仁助は太作に逢へば手拭をとつてお辭儀しなければならないやうになりました。

初め太作は仁助と同じに木樵をやつてゐましたが、今では地所を相應に持つて、それに豆や馬鈴薯をつけたり、平らな地面は田にして稻を植ゑたりしてゐます。然し村の人達は太作のことをほんとうに尊敬はしませんでした。

太作は、初め少しばかりの地面しか持たないのを、貧乏な木樵達に少しばかりのお米を貸して、お米を返へさない人の持つてゐた地面はどん〳〵取上げて自分の田畑にしてしまひました。村の人々は皆な太作のことを憎んでゐるけれども、面と對つては誰れも惡くいふものがありませんでした、それは村

の人々は大抵太作からお米やお金を借りてゐましたから、もし惡口でもいつたら、お米やお金の催促をされやしないかと心配してゐるからなのです。

仁助の家は太作の家のすぐ下にありましたが、仁助の親父が病氣になつて寢てゐる中に、いつの間にか、仁助の家の屋敷の半分以上を自分の畑に書き替へてしまひました。正直な仁助が朝起きて自分の畠へ行つて見ると、太作が自分の家の畠に南瓜の種子を蒔いてゐました。幾ら正直な仁助でも默つてゐませんでした。

(太作、そこは己らの畠でねえか?)

と仁助はきゝました。

(なに馬鹿いふだ! この畠はな、お前達の親父から己らの買つたものだ)

といつて、太作は持つてゐた鍬を取りあげて、地面の上に、太作の家の畠と仁助の家の畠の形を『繪圖面』にして描いて見せました。仁助は太作の描い

た『繪圖面』を見ても何が何だか、さつぱり解りませんでした。

（己ら然うしたもの見ても解らねえけれども、己らの親父は何時この畠を賣つたんだべえな？）

と仁助は元氣のない顏をして太作にきゝました。

（何時賣つたつて？　お前達の親父にきいて見ろ。親父がこの春、己らのところから米を二俵持つて行つたべえ、その時、こゝの畠を抵當にして持つて行つたゞよ。考へてから物をいつたらよかべえ！）

と反對に太作は仁助のことを叱り飛ばしました。仁助は然ういはれて見れば太作の方が道理のやうに思はれたので、頭を搔きながら家の中へ引込んでしまひました。

二

仁助の親父はこの春から中風で寢てゐるので、仁助はたつた一人で働かな

ければなりませんでした。仁助は毎日縄と鉈を持つて山へ薪を採りに行きました。一日山へ行つて薪を採つて來ては、其翌日町へ賣りに出て四十錢か五十錢のお金を持つて歸るのです。

仁助の家には中風病みの父親と、仁助の妻と幼い子供が三人ありました。仁助一人で、この五人の家族を食べさせて行くのは中々容易なことではありません。幾ら稼いでも稼いでも追ひつきません。仁助は時々、

（一層のこと首でも縊つて死んでしまはうか？）

と思つたこともありました。然し自分が死んでしまへば、中風病みの父親も可愛い三人の子供も死んでしまはなければならない。それを考へると仁助は死ぬ元氣もありませんでした。

或る日のこと、仁助は山の上で汗を拭きながらぼんやり物を考へてゐると何處からとなく二羽の鶴が飛んで來ました。

（キョー、キョー）

といふ鳴聲が仁助の頭の上をかすめて行きました。仁助は思はず顔を上げて鶴の飛んで行く方を見ました。すると一羽の鶴は何處か怪我でもしてゐると見えて、時々落つごちさうになります。するともう一羽の方は後になり先になりしてその鶴を助けて行く樣子なのです、仁助は餘り不思議なので、自分の仕事のことも忘れてしまつて、鶴の飛んで行く後を追つて行つて見ました。

仁助は鶴を追つて段々山を下りて行きますと、山と山の狹い谷間に一坪ばかりの水溜りがあつて、そこへ二羽の鶴が降りました。尙ほよく見てゐるとその怪我をしてゐる鶴の方が水溜の中へ入つてゐると、もう一羽の鶴の方が嘴で丁寧に洗つてやつてゐます。そして暫くすると二羽の鶴は樂しさうに羽音を揃へて飛び上りました。

（キョー、キョー）

といふ鳴聲がまた仁助の頭の上をかすめて行きました。

仁助は其翌日も其また翌日も毎日鶴の飛んで行くのを見ましたが、一週間目に山へ行つた時は幾ら待つても鶴は來ませんでした。

（何うしたんだらう？）

と仁助は不思議に思ひながら、毎日鶴の降りる澤のところへ行つて見ると、その邊に鶴の足跡が澤山についてゐました。

（鶴の足を洗つたところで、己れも一つ足を洗つてやれ）

と仁助は思ひながら、自分の足を入れやうとすると、その水溜りが溫い溫い お湯でありました。

「おや、おや、たゞの水だと思つたら湯だな！）

と仁助は飛上りました。仁助には、鶴が毎日この谷間へ降りるのは湯へ入るためだといふことが初めて解りました。仁助は急に嬉しくなつて、その湯壺

の周圍を舞踏ををどつて歩きました。

三

仁助は其翌日中風病みの親父を背負つて山へ來ました。父親は仁助が氣狂ひになつたのではないかと心配しましたが、あんまり熱心にすゝめるものですから、山へ背負さつて行く氣になりました。

仁助は谷間の岩を鉈で綺麗にけずり取て四角な湯槽を作つて、その中へ中風の親父を入れて靜かに洗つてやりました。仁助の親父は中風になつてから一日もお湯へ入つたことがないので、垢が大變に出ました。

（あゝ、いゝ心持ちになつた！）

と親父は嬉しさうにいひました。

仁助はかうして毎日親父を背負つて、谷間のお湯へつれて行きました。十日目にお湯へつれて行つた時は、中風病みの親父が杖をついて一人で山を登

れるほどになりました。親父は涙を流して喜びました。

半年も經たない中に、仁助の親父は山へ薪を採りに行つたり、町買ひに行つたりすることの出來るほどになりました。村の人達も山の中に溫泉が出來たといふので、大喜びです。野天のまゝでは雨の降つた時や風のたつた時は不便だといふので、村中の人々は皆な申合はせて、湯槽の上に粗末な小屋を一つ建てました。

正直な仁助は自分の見つけた湯ですけれども、自分のものだとは思ひません、村の人達が小屋を建てゝ呉れた時、自分もお客の一人になつて隅つこの方で小さくなつてお湯へ入つてゐました。

村の庄屋は、殿樣にお届けもしないで、自由に溫泉を使つてはいけないと思つたので、ある時、城下へ行つて、その事を町奉行に申上げました。町奉行は早速その事を殿樣に申上げたところが、殿樣も大變お喜びになつて、

（國の繁へになることで、結構な事ぢや、溫かになつたら、私も入湯いたしたいものだ）

とおいひになりました。

庄屋も大喜びで村へ歸つて、みんなに傳へました。

其翌年の春、桃の花の綺麗に咲いてゐる頃殿樣は奥方と駕籠を並べてこの新しいお湯へおいでになりました。仁助の見つけた湯小屋の周圍に殿樣の御紋のついた幕が廻はされ、庄屋の家より二倍も大きいほどの湯小屋が出來ました。村の人々は土下座といつて荒蓆に頭を垂れて殿樣をお迎へ申上げました。

（誠に結構な湯ぢや）

と殿樣は家來の方々に申されました。それから、

（一體この湯は誰れの湯だ？）

と殿様が庄屋におきゝになりました。

其時、庄屋と一緒にお伺ひ申上げてゐた太作は急に御前に進み出て、

（手前の持つて居ります山の渓間に自然と湧いたものでございますから、手前どもの湯でございます）

と申上げました。

すると殿様は、

（山の持主をきくのではない。一體誰がこの湯を見つけ出したのだ？）

と重ねて申されました。

そこで、庄屋は、仁助が鶴の降りたのを見たといふことや、中風の親父を背負つてお湯へ入れてやつたことなぞを一々精はしく申上げました。すると殿様は大變お喜びになつて、

（それでは、以後、この湯を『鶴の湯』と呼んだらよからう）

と仰有つて、仁助には百兩のお金を下さいました。今のお金では千圓以上の價ださうです。太作は、それと反對に、奉行に屆出でをしないで、勝手に山や田畑を所有してゐたといふ咎で、太作の持物全部沒收になり、村の財產に書換へられてしまひました。

王様と子供

むかしペルシャの國に一人の大變に年とつた王様がありました。みなさんも知つてる通り、王様といふものは大變に偉いものですが、この王様はあんまり年とつてゐるものですから、この世の中には何の樂しみもありませんでした。何しろ齒といふ齒は一本もなく拔け落ちてしまつて、頭には一本の髪の毛もなくつるつるに禿げて光つてゐるし、眼といへば何んないい眼鏡をかけても何も見えない位でした。

王様のたつた一つの願ひは、

『もう一度若い子供になりたい、』

といふことでした。

するとある日一人の魔法使の女が王様のところへ來て、

『王様が若くなりたければしてあげます。』

と申しました。

王様は大變に喜んで、

『もし私が若い子供になれるなら、この宮殿の寶物藏の寶物をみんな呉れてやつてもよい。』

といはれました。すると魔法使の女は、

『それでは王様のお年を取り替つこをする子供を探さなければなりますまい。』

と答へました。

そこで國中こんな噂さがぱつと擴がりました。誰れでも、若い年と健康な力を王様に献上するものは、王様の寶物を殘らずいただけるのだ。

この噂さを聞いてゐた若い子供等は、吾も吾もと王様の宮殿へ集つて來ま

した。その多勢の子供の中には、色色な身分の子供等がありました。然し大抵は貧乏な子供等ばかりで、乞食の子や羊飼の子なぞが一番多くありました。

子供等は王様の寶物がほしさに集つて來たものの、王様のお顔を見ると、今にも死にさうなほどよぼよぼして、みぢめに見えるので、誰れも自分の若さと健康を王様に献上して、その代りに自分がよぼよぼの老人にならうといふものがありませんでした。

集つて來た子供等は元氣のない顔をして、みんな歸つて行つてしまひました。然しその内たつた一人、非常に美しい顔の少年だけが後に殘りました。

そしてその少年は大膽にも、かういふことを王様に申上げました。

『王様、もし寶物だけでなく王様のお位を私にくださるならば、私は喜んで、私の若さと健康を王様に差上げませう。』

王様は少年の言葉をおききになつて、

王様と子供

『王の位は全部はやれないが、私の持つてゐる國の半分だけやらう。』

といいましたけれども、少年はきき入れずに、是非王様の位をくださるやうに申しました。

王様は少年に對つて、

『もし私が王様を廢めたら、何うすればいいのだらう？』

とおききになりました。

少年は美しい聲で歌をうたひ、踊をおどつて見せて、

『あなたは、私のやうに、愉快に歌つたり、踊つたりすることが出來ます。』

と申しました。

今度は王様は、

『お前はそれでは何うするつもりだ？』

とおききになりました。するとその少年は、

『私は幼い頃から、王様の偉いものだといふことをきいて居ります。何うか一度その王様になつて見たいのです。』

と申しました。

王様には若さと健康が何よりの望みで、少年には王様の位と寶物が何よりの望みでしたから、とうとう相談がまとまりまして、王様は子供に、子供は王様になつてしまひました。見る見る内に少年の顏に皺がよつて來て、齒も拔け、眼も霞んで來て、一人の年とつた王様の姿になつてしまひました。さて自分の周圍を見ると多勢の家來達が鎗や劍を持つて、番をしてゐます。少年の王様は悲しくなつて來ました。

一方王様は年こそ若くなりましたが、友達もなく、歌をうたはうとしても歌の文句も知らないのです。それに田舍の少年ですから、草刈りにやられたり、使ひにやられたりするので、王様にはそれは死ぬほど悲しい事でした。

そこで、王様と少年は相談をして、元通りの人間になりませうといふことになり、王様は元の王様に少年は元の少年になりました。

二月目に年とつた王様はお亡くなりになりました。王様の枕元には十一人のお醫者様がついてゐましたけれども……

村の少年は、ああ早く王様を廢めていいことをしたと思ひました。

少女と鳩

出場の人と鳩

君子　十六歳
綾子　十三歳
銀子　十三歳
親鳩　父
親鳩　母
子鳩　兄
子鳩　妹
子鳩　其の妹
其他　鳩の友達

場所

ある森の中の寺院の傍

時

現代

すべて舞臺は簡單なほどいゝのです。少女の方も鳩の方も極く平易に自然に會話をして行くので

す。芝居をする氣持ではいけません。
第一節は人間の世界で、第二節は鳩の巣、つまり鳩の世界です。

第一節（夕方）

舞臺は深い森の中で、正面に赤い大きなお寺が見える。時々鳩の羽ばたきの音が深い緑の中から聞えて來る。遠く鐘の聲が響く。小鳥のいそがしさうに囀きを交はす聲がする。

綾子。（美しい洋服を着てゐる）もう何時頃でせう？

銀子。もう五時過ぎでせう。學校を出たのは四時だから。

綾子。もう然んなになつて？　まあ綺麗ね！　鳩があんなに下りて！

銀子。まあ！綺麗だわね！

綾子。（二人は舞臺の中央に立止り森の奥の方へ目を投げる。）何うしてあんなに鳩が下りてゐるのでせう？　もう鳩は箱の中に入る頃ぢやないでせうか？

銀子。然うね。いつもならばもうみんなあの箱の中へ入つてゐる頃なのね。

何うしたんでせうね？　行つて見ませうか？

綾子。およしなさいよ。鳩が怖がつて逃げるから。それよりこゝで見てゐませう。あの青い草の中で眞白な鳩が何羽も何羽も動いてゐるのはほんたうに綺麗ですね！

銀子。え。あの小さな御堂の上にもあんなに乘つてゐるわ。誰か豆でもやつてゐるのでせうか？

綾子。いえ。誰もゐないやうよ。おや！　鳩は何かつツ突いてゐるやうよ。御覽なさい。あの草の中にも何んだか小さな物が動いてゐるでせう？

銀子。さうね。蛇でもつツ突いてゐるんぢやないでせうか？　家の兄さんがいつか烏が蛇をつツ突いてゐるところを見たんですつて。

綾子。さう？　でも私、鳩は蛇を食べないと思つてよ。

銀子。私も。

綾子。（銀子を制するやうにして。）銀子さん、あれ鳩の子なのよ。ほうら御覽なさい。小さな白い羽を動かしてるぢやないの？

銀子。あら、さうね。鳩の子が何うしてあんなところにゐるんでせう？

綾子。よく飛べないのに、飛んで歩いたんでせう。きつと、それで途中で疲びれてしまつたのよ。

銀子。可愛いわね。あの鳩の子を飼つて見たいわ！

綾子。私も。さあ行つて見ませう。

（二人は舞臺右手に走つて行く。鳩の羽ばたきが烈しく聞える。）

（やがて二人は鳩の子を持つて舞臺に表はれる。）

綾子。私にも抱かせてちやうだいよ！

銀子。え。でも私可愛いゝわ！　こんなに圓い目をして見てゐるのよ。

綾子。（鳩の身體にそつと手を觸れて、）まあ美しい毛だこと！　何うしてこんなに

すべすべしてゐるんでせうね！

銀子。それに、この足の可愛いこと！　私の指にしつかりつかまつてゝよ。

綾子。私の家には鳩を入れる大きな籠があつてよ。青い色なの、そして綺麗な房がついてるの。私あの籠に入れて置くわ。

銀子。私の家には鳩の籠はないけれども、綺麗な鸚鵡の籠があるの。私あの籠に入れて置かうよ。

綾子。銀子さん。私にも抱かせてちやうだいよ、私一つち先きに見つけたんだから。この鳩は私のよ、それをあんたばつかり抱いて、隨分だわ！

銀子。あらひどいわ、ひどいわ、あんなことといつて！　あんた怖がつて抱けなかつたぢやないの？　私が拾つたんだから私のものなのよ。

綾子。（怒つて銀子から離れる、）いゝわ、いゝわ！　私知らないから！

（二人は短い沈默をつゞける。この時舞臺左手から君子が來る。女學校の歸りらしい服裝、茶褐色のカシメーアの袴を着けて、美しいパラソルを持つてゐる。）

君子。（銀子の方を見て。）銀子さん、何うしたの？　それは鳩ぢやありませんか？

銀子。えゝ。鳩よ。

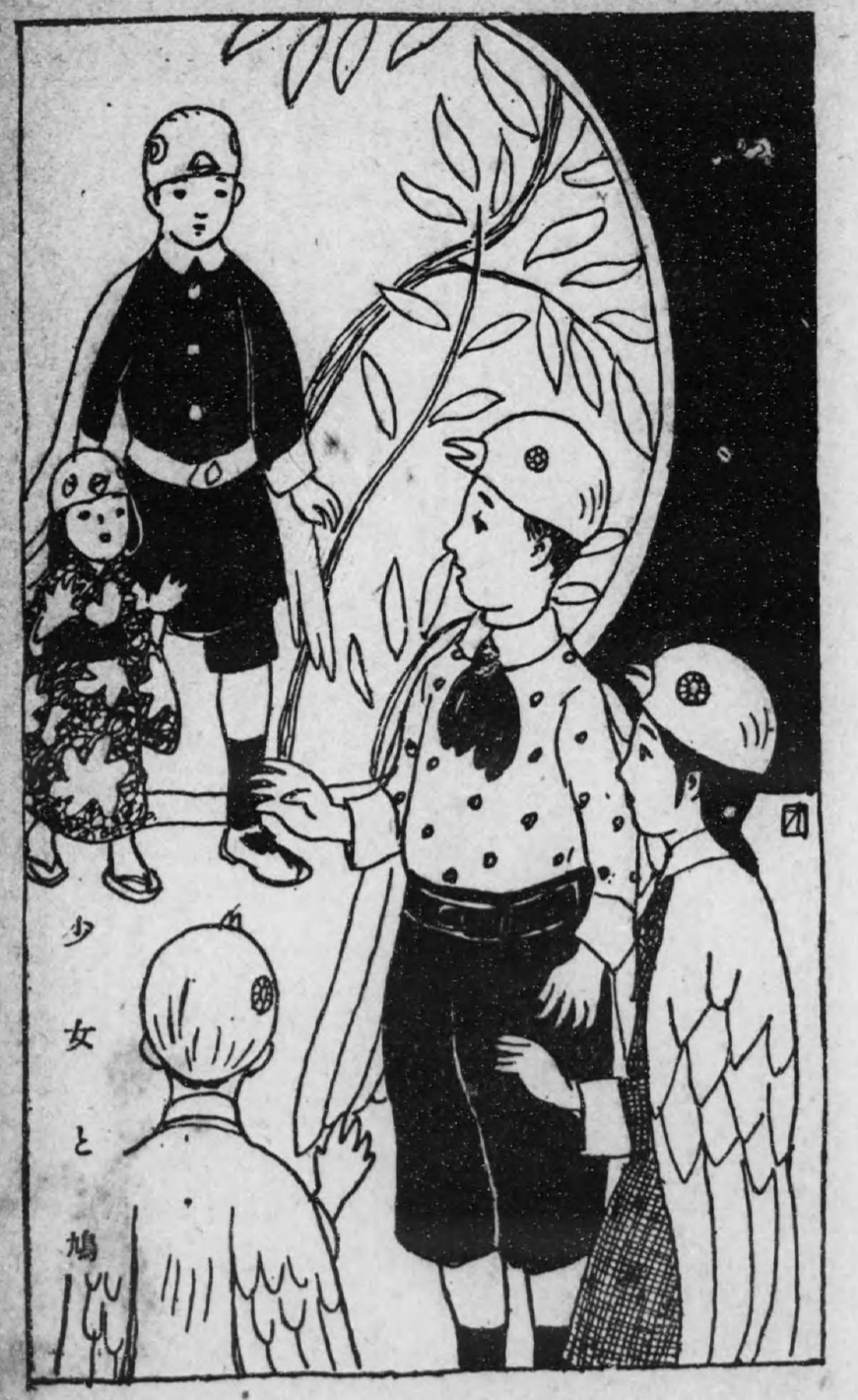
君子。何處から持つて來ました。

銀子。落ちてゐたの、あの草の中に。

君子。さう？　それを何うしやうといふの？

銀子。私あんまり可愛相だからお家へつれていつて飼つてやりたいと思つたの。私の家には大きな綺麗な鸚鵡の籠があるの。

君子。（綾子の方を見て。）綾子さん、何うしたの？　あんた泣いてるの？　何うしたんです、銀子さん？



銀子。何うもしないの。でも綾子さんは私の拾つた鳩を私んだつていふのよ

綾子。僞よ。私が一つち先きに見つけたのよ。私が見つけたのを銀子さんが拾つて自分でばかり抱いてたのよ。

君子。さう？　解りました。泣くんぢやありませんよ。さあ、こちらへいらつしやい。泣くとみんなに笑はれてよ。

（二人の前に立つ。）

この鳩の子は誰れのでもないのよ。あんたのでもなければ、あんたのでもないの。この鳩はね、あのお宮の箱の中で生れたんでせう？　だから、あの箱の中に歸るのが一番好きなのよ。銀子さんも綾子さんも、朝早く起きて學校へ行つて晩になると、お家へ歸るでせう？　それと同じ事なのよ。この鳩の子のお家はあの箱なの、そして、あの箱の中にはお父さんもお母さんもゐるのよ。この鳩の子は何んなにお家へ歸りたがつてるでせう！

さあその鳩を拾つたところへ置いていらつしやい。

銀子。（ためらひながら、）でも、私可愛いんですもの！

君子。可愛いゝから尙更ら置いて來なければいけないのよ。銀子さんが學校の歸りに誰か知らない人が來て、あなたを連れて行つてもいゝと思つて？　お父さんやお母さんに二度と逢へなくともいゝと思つて？

銀子。いや！

君子。さうでせう？　鳩の子もやつぱり同じ事なの。その鳩のお父さんやお母さんが何んなに待つてるか知れやしませんよ。

銀子。さうね。それぢや。私置いて來るわ。

（銀子は鳩の子を抱いて去る。）

綾子。君子さん、あんなに鳩が下りて來てよ。

君子。さうね。綺麗だこと！

（銀子は急いで歸る。）

君子。あんなにみんな喜んでるでせう（二人に、）銀子さんも綾子さんも喧嘩をするんぢやありませんよ。さあ、一緒にお家に歸りませう。

（三人は小聲に樂しげに話しながら右手に去る。鳩の羽ばたきが二三度聞える。）

第二節（前の節と同じ頃）

舞臺は鳩の家、粗末な木造の室。正面に三つの圓形の入口がある。藁、自然木の枝なぞが散亂してゐる。木の枝を組み合はせたやうなテイブル、椅子などがある。

父鳩。（鳩の形の扮裝をしてゐる。以下鳩は鳩の扮裝）あの子は未だ歸つて來ないか？

母鳩。（テイブルの傍に進んで、心配さうに。）えゝ。未だ歸つて來ませんよ。今八郎とお花が探しに行きましたけれども、何うしましたかね、私ほんたうに心配になつて來ましたよ。

友鳩。（慰めるやうに、）なに、今に歸つて來ますよ、まだ早いんですもの。今お

寺の鐘が鳴つたばかりです。私達の子供の頃は隨分遲くまで遊んでゐたぢやありませんか……夜になつて、月のいゝ晩なぞは護國寺や氷川の森まで飛んで行つたこともあるぢやありませんか、それを思へば何んでもないことです。

母鳩　ですけれども、あの末の子は少し弱い子でしてね、それで私も心配してゐるんですよ。

友鳩。然し翼はもう大丈夫なんでせう？

母鳩。え。何うかかうか飛べるだけにはなつてゐるやうですが、何しろ身體が未だほんたうに固まつてゐないのですから。

友鳩。然うですか？　何しろ子供等には心配させられますね。（主人に）然しあなたはあんまり心配なさらない方がようございますよ、また身體でも惡くするやうだといけませんから。

父鳩。え。有難う。

友鳩。おや誰か來たやうですね。

（兄妹の子鳩は羽ばたきの音と共に室の中に入る。）

父鳩。（怖しい事を待設けるやうに、）何うした、見附かつたか？

兄鳩。え。見附かるには見附かつたんですけれども、お父さん、大變なことが出來たんです！

母鳩。大變なことつて何うしたの？　早くお話し！

兄鳩。あの子は人にさらはれて行つてしまひました！

（妹鳩は母鳩の胸に顏を當てゝ烈しく泣く。母親も泣く。）

父鳩。人にさらはれた？　誰れに？　何處で？

兄鳩。あの銀杏樹の下の草原のところで……あの子が疲れて休んでゐるところを近所の女の子が二人來て連れて行つてしまひました。お父さん何うし

たらいゝでせう？

父鳩。（落膽して。）あゝ、あの子も、とうとうさらはれてしまつたか！　八郎お前の兄さんも、あの銀杏樹の邊で人にさらはれたんだよ。あゝあの子は何んなに家へ歸りたがつてゐるだらうね！

母鳩。でも、お父さん、あの子をさらつて行つたのは女の子だけに幾らか安心ですよ。女の子だと幾ら何んでもそんなに慘酷しいことはしないでせうからね。

父鳩。いや、然うぢやない……一層一思ひに殺された方がいゝやうなものだ。あんな籠の中に入れられてゐるよりは死んだ方が幾らいゝか知れたものぢやない！

友鳩。（決心を示す。）皆樣、心配なさるな！　私はきつとあの人を連れて歸つてお目にかけます！

父鳩。人の手に渡つたものを何うして取り返すつもりですか？

友鳩。まあ、兎に角私に任せてください！

（友の鳩は急いで室を出る羽ばたきの音がする。）

妹鳩。お母さん、ほんたうに何うしたらいゝでせうね？

母鳩。さうね、何うしたらいゝものだらうね？　吉枝をさらつて行つた子は何處の子なの？

妹鳩。一人はお醫者の子で、一人は役人の家の子なのよ。

母鳩。さういふところの子だと、あんまり酷いことはしないだらうとは思ふけれども、吉枝は何んなに家へ歸りたがつてゐるだらうね！

妹鳩。今頃籠の中へ入れられて、泣いてゐるかも知れないわね！

兄鳩。然し、伯父さんがきつと連れて來て見せるつてお仰有つたから、餘り心配しないでもう少し待つてゐませう。すべて物といふものは、結極、なるやうにしきやならないものです。（羽ばたきの音がする。）おや外が大變騒しいやうですね。

（この時友鳩と子鳩とが室に入る一同驚きと喜びを持つて二人を見る。）

子鳩。（母のところへ進んで接吻する。）お母さん。たゞ今！

母鳩。おゝ！　吉枝、お前は何うして歸つて來られたの？

友鳩。（愉快げに。）私がお宅を出て銀杏樹のところまで飛んで行くと、草の中から私の名を呼ぶものがあるんです。見るとお宅のお嬢さんです……大分弱つてゐるやうですが何處も何ともないやうです。先づ安心してください。

父鳩。（立つて友鳩の手を握る。）何うも難有う！　君が來て呉れたので、吉枝も無事に歸れたのです！

（親鳩は子鳩の傍へ進んで、子鳩を抱きあげ、長い接吻を與へる。この瞬間に外では烈しい羽ばたきの音がして大勢の鳩の群が室に入り各喜びを述べる。）

——靜かに幕——

羚羊の話

（スイツツルの童話）

フランスに近いスイツツルの國境ユーラ山脈の中の、小さな谷間の村に一人の獵人が住んでゐました。この獵人は非常に弓を射ることが上手で、これと狙ひを定めて放つた矢が、的を外れた例は唯の一度もありませんでした。

或る日、獵人はいつもの通り弓を携へて山へ登つて行きますと、或る大樹の蔭に一疋の羚羊が無心に草を食べてゐるのを見ました。で獵人は脊に負つた箙から矢を拔かうとしました。すると恰度其の時羚羊は獵人を認めて、大急ぎで逃げ出しました。山には彼方此方に、大きな岩や樹が聳えてゐましたので、流石弓の名人も走つてゐる羚羊を射ることが出來ませんでした。獵人は、それでも思ひ切ることが出來ず、一生懸命羚羊の後を追つかけて行きま

した。そのうちに、羚羊は山の頂上に岨立つてゐる、大きな岩の突端まで逃げて來ましたが、其處から先きへは、もう一歩も進むことが出來ませんでした。何故ならばその岩の彼方は深い〳〵谿に面して、切り立てたやうな斷崖になつてゐましたから、羚羊はもうどうすることも出來なくなりました。前へ進めば谿へ落ちて身體を碎かねばなりません。ぢつとしてゐれば獵人の矢を受けねばなりません。絶望した可哀さうな羚羊は、其處へ坐つて悲しさうに泣き出しました。

獵人は泣き悲しんでゐる羚羊を見ても、何とも感じませんでした。そして『今度は大丈夫だぞ！』と呟き乍ら、矢を一本拔き取つて弓に番へました。が、狙ひを定める爲め再び羚羊の方を仰ぎ見た時、獵人は吃驚して弓を取り落しました。

羚羊の前には脊の高い、眞白な長い髭の生えた、そしてやはり眞白い衣服

を纏つた老人が、泣いてゐる羚羊を庇ふ樣にして立つてゐました。獵人は怖ろしさに慄え乍ら、老人の顏を仰いだ時、老人は靜かに云ひました。

『谷のお方、あなた方人間は、野を耕し穀物を實らすことが出來る。何故このやうに山の住民を苦しめに來なさる？　私は唯の一度も、あなたの家へ鷄や牛を盜みに行つたことが無い。何故私の大事な羚羊や鷲の子を殺すのです？』

『私は貧乏だからです』と獵人が答へました。『私には他の人達が持つてゐるやうなものは何にもありません。私には唯だ『飢餓』があるばかりです。私は、一羽の鷄も、一頭の牛も、一坪の田地も持つてをりません。ですから、私は鷲の卵や、羚羊を見付けに山へ登つて來るのです。鷲や羚羊は山の中で自由に食物を得てゐます。けれども、私の谷の村では食物を得ることが出來ません』

羚羊の話

獵人の答へを聞いた老人は、暫く考へてから、獵人を手招ぎして傍へ呼びました。それから小さな木の壺を取り出して、羚羊の乳を絞りました。壺に一ぱい充たされた乳は、たちまち氷のやうに晶結りました。老人は獵人にそれを與へ乍ら云ひました。

『さあこれでもつて、あなたはもう何時までも飢ゑる心配は無い。一度に皆食べ盡して了ふことさへしなければ、この乳のかたまりは、永久にこのまゝ減りもしなければ、味も惡くはならない。若し喉が渴いたならば、私の流す汗が、谿谷の小川を澄んだ水になつて流れてゐるから、勝手にそれを飲むが好い。そのかはり今後は決して、山の住民を苦しめないやうにして貰ひたい。』

そこで獵人は、もう再び弓を採ないと誓ひました。そして老人の與れた乳のかたまりを持つて山を下りました。その後獵人は、食事の度毎に乳のかたまりを出して食べましたが、老人の云つた通り、それは何時までも美味しく

そして少しも減ることがありませんでした。獵人は弓と矢を天井にぶらさげたまゝ、もうそれを使ふことが無くなりました。

さて山の羚羊達の方では、段々人間を恐わがらないやうになりました。そして時々山を下つて、人里近くまで遊びに來ては、其處で村人達の飼つてゐる牧羊と戯れたりする程になりました。

或る晩のことでした。獵人は家の窓際に坐つて、何氣無く外を眺めてゐました。ユーラ山の頂きには白金のやうな月が表はれて、晝のやうに明るく下界を照してゐました。不圖獵人は、程遠く無い所に、一疋の羚羊が遊んでゐるのを見付けました。そしてそれを射やうと思へば、家の外へ出なくとも、十分その窓から矢を放つことが出來ると思ひました。非常に大きな誘惑が獵人の胸に湧き起りました。獵人は山の老人との誓ひを忘れて、弓を取り下しました。そして彼の熟練した矢は、誤たず羚羊の胸を貫きました。獵人はす

ぐに戸外に走り出て、羚羊の屍を擔いで來ました。やがて彼は久し振りで羚羊の肉を味ひました。それから不圖、例の乳のかたまりのことを思ひ出して、戸棚を開けて見ました。すると其處から、兩手と兩眼だけ、人間の形をした大きな黑犬が、乳のかたまりを口に啣へて、飛び出して來ました。犬は開いたまゝになつてゐる窓を飛び越えて、山の方へ走つて行きました。獵人は非常に心配しました。けれども乳のかたまりが無くなつた以上は、又弓を採つて獵をしなければ飢ゑ死にをする外はありませんでした。

羚羊は、今では人里近くまで毎日出て來てゐましたから、獵人は山へ登つて行かなくとも十分に望みを達することが出來ました。けれども又しても獵人の怖ろしい矢が動き出したのを知つた羚羊達は、段々山を下りなくなつて到頭しまひには、一疋も見えなくなつて了ひました。

獵人が山の頂きで白髮の老人に會つてから三年程經つた或る日、獵人は昔

のことを忘れて、再び山へ出掛けました。すると或る叢の中から一疋の羚羊が走り出しましたので、早速矢を放ちました。

急所を射られた羚羊は血を滴らし乍らも、なほ走り續けて、到頭あの三年前に老人の現はれた岩の突端まで行つて倒れました。獵人は、その後を追つて倒れた羚羊の傍に近寄りました。恰度その時、最後の息を引きとらうとした羚羊は、苦しさうに呻き乍ら、身體をもがいた拍子に、深い谿の中へ落ちて行きました。獵人は、羚羊が何處かの岩角にでも引つ掛れば好いがと思ひ乍ら、深い谿の方を覗き込みました。すると獵人の眼は、羚羊の屍を見るかはりに、薄暗い谿底からぢつと上を仰いでゐる白髮の老人の眼を見付けました。獵人は逃げやうとしました。けれども、一歩も足を動かすことが出來ませんでした。白髮の老人は獵人の名を三度呼びました。すると獵人は眞逆さまに深い谿底へ落ちて行きました。

鷹の御殿

一

昔ロシアのある田舎にかなり大きな地主のお爺さんがあつて、そのお爺さんに三人の美しい娘さんがありました。上の二人の娘は中々元氣で、何方かといへば、おしやべりで、見え坊な方でしたが、三番目の娘は無口な恥しがりやでした。然しお爺さんはこの三人の娘を何れ劣らず可愛がつてゐました。

ある年の冬、お爺さんは春の支度をするために、その田舎から少し離れた町へ買ひ物に行くことになりました。お爺さんは町へ行く時三人の娘に向つて、お前達の欲しいと思ふものは何でもいふがいゝ、私がお土産に買つて來てあげるからといひました。第一番目の娘は、

「お父さん、私には金の指輪と靴を買つて來てください。」といひました。

第二番目の娘は、

「私には天鵞絨の上着と絹のショールを買つて來てください」といひました。

すると第三番目の娘は、

「お父さん私は何もいりません、たゞ赤い花が欲しいんです」といひました。

お爺さんは三人の娘の土産物をきいて喜んで町へ出かけました。そして晩方までに、その土産物をたいてい買ひ集めましたが、三番目の娘の欲しいといつた赤い花だけはどうしても見つからないのです。

「赤い花がどうしても見つからないが、どうしたらいゝものだらう？」

とお爺さんが悲しさうな顏をして歩いて來ますと、向うからも一人の年寄が歩いて來ました。お爺さんはその年寄を見ると、その人がちやうど、美しい赤い花を持つてゐました。お爺さんは餘りその花が欲しくなつたので、

「どうかその花を私に賣つて呉れませんか？」といひました。すると其年寄

は頭を振つて、

「いえ、この花は賣る花ではありません。これは、だれでも、私の息子のお嫁さんになる人に上げるのです。」と答へました。

お爺さんはその花が欲しさに、うつかりして、娘の心持をきゝもしない内に、その花を三番目の娘のために貰ひ受け、其代りに娘をその年寄の息子さんのお嫁にやる約束をしてしまひました。するとその年寄は、

「それではこの花を差し上げませう。然し私の息子は悲しいことには、夜の間は美しい人間でゐますけれど、晝になると鷹になつて空を飛んでゐなければならないのですよ。」といひました。

お爺さんはこの話をきいて、大變悲しくなりましたが、それよりも、ともかく、早く、土産物を娘達に見せたい一心で、急いでお家へ歸りました。

二

お爺さんはお土産を娘達に渡すと、ほつと安心しました。然しその安心は長くは續きませんでした。

三番目の娘はお爺さんからお話をきいて、がつかりしてしまひました。然しどういふ譯か、娘はお爺さんほどは悲しんではゐない樣子でした。そして赤い花を抱いて自分のお室へ這入りました。

夜になると上の二人の娘達はお父さんのお土産を枕元に置いて、喜んで眠つてしまひましたが、第三番目の娘は赤い花を抱いて寂しさうに一人でお室に坐つてゐました。

すると急に、窓の外で、大きな鳥の羽ばたきがしたと思ふ間もなく、窓から美しい一人の騎士が這入つて來て丁寧に禮をして、その後でにつこり笑ひました。

「あなたはどなたです。」と娘は不思議さうに、その騎士に尋ねました。

「私はあなたに赤い花を差し上げたあの年寄の息子です。二人でいつまでも仲よくして暮しませうね。」といひました。三番目の娘は初めは怖しいやうにも思ひ、悲しいやうにも思ひましたが、だん〳〵慣れて來ると、その騎士がなつかしく親しい人のやうにも思はれて來ました。騎士は、それほど立派な、やさしい人でありました。然し悲しいことには、鷹は夜の明け放れぬ内に、飛んで行かなければならないのです。

明る日二人の娘は、美しい指輪をはめ、美しい着物を着て教會へ行きましたが、第三番目の娘だけは一人寂しさうに留守をしてゐました。すると、どこから來たのか、窓の外に立派な馬車が留りました。そして誰が持つて來たものか、美しい着物が一揃ひ自分の前に現れました。娘はその着物を着て鏡に向つて見ますと、女王樣のやうに美しく見えました。娘は自分も教會へ行きたくなつたので、早速馬車に乘つて出かけました。すると、みんなはその

鷹の御殿

娘があんまり美しいので、誰も村の娘とは思はないで、たゞあつけにとられて眺めてゐるばかりでした。上の二人の娘達も妹とは知らずに宮様をでも見るやうに、びつくりして見てゐました。

三番目の娘は御祈禱のをへない内に急いで家へ歸つて、知らん顔をしてゐました。

美しい鷹は毎夜羽ばたきを立てゝ、娘のお室へ訪ねて來ました。娘はこの鷹の騎士か段々好きになりました。二人は永い間室の中でお話しをしたり遊んだりしました。そして明け方近くなると、騎士は鷹になつて大空高く飛んで行きました。

三

ある時上の娘達が、夜遅くまで爲事をしてゐると三番目の娘の室の方で、人の話聲がするので、二人の娘は不思議に思つて、室の中をそつと覗いて見

ました。すると妹はだれだか立派な騎士と睦じさうにお話しをしてゐるではありませんか。

二人は驚いて、ぢつと覗いてゐますと、その騎士はやがて、

「では、また明晩來ませうね。」といひながら、忽ち鷹の形になつて、窓から飛んで行つてしまひました。

上の娘達は妹のことを憎んで、大變惡いことを考へました。二人はどうかしてあの美しい鷹に傷をつけて、妹のところへ來られないやうにしてやらうと相談したのです。

それで二人は明る日三番目の娘のゐない時に、鷹の留る窓のところに、澤山のガラスの缺けらを立てて置きました。

三番目の娘は、姉さん達がそんな惡いことをしてゐるとは氣がつかないものですから、宵の中から美しい鷹の來るのを今か〳〵と待つてゐました。す

ると勇しい羽ばたきがして鷹が飛んで來ました。娘は喜んで、窓のところへお迎へに行つて見ますと、どうでせう、美しい騎士は、手も足も血みどろになつてゐるのです。

「どうなさいました。一體どうなすつたのでせう。」と娘はおろ〳〵して尋ねました。騎士は何にも答へずに、怨しさうな目をして、暫く娘の顏を見てゐましたが、やがてまた元の鷹の形になつて、急いで飛んで行かうとしました。娘は悲しくなつて、

「私ではありません。私は何にも知らないのです。どうぞ許して下さい。」といひました。

「私はもう一生あなたにお目にはかゝりません。」と鷹も悲しさうに答へました。

「ではちよつと一言私に敎へてください。——あなたのお家は何處です」。

「私の家は山を越え、海を越えた、遠い〳〵ところです。」

「何方の方です。」

「これから、ずつと、ずつと東の方です。然し誰にも私の家を尋ね當てることは出來ません。」

「いゝえ、私はきつと尋ね當てゝ見せます。」

「來たければ勝手にたづねていらつしやい。然し私はもう誰れをも信ずることは出來ません。さやうなら・・・さやうなら。」といつて、鷹はそれなり飛んで行つてしまひました。

三番目の娘は後でよくそこいらを見て見ますと、窓のところに澤山のガラスの缺けらが立つてゐて、その上に鷹の血が眞赤についてゐました。娘はそれを見ると、誰がこんな惡いことをしたのか、すぐに氣がつきました。

然し姉達には何にもいひませんでした。娘は明る日すぐに旅に出ました。

たつた一人であの美しい鷹をさがすために。

この娘が、やつと、しまひにあの鷹の御殿を訪ね當てるまでには、それは〳〵言ふに言はれぬ苦勞をしました。

でもそれを一々お話すると長くなります。

ですからこゝでは、たゞこの娘が、しまひには、鷹の御殿の女王さまになつて、うつくしい鷹の騎士と二人でみんなから、大さう可愛がられながら、永い間幸福に暮したと云ふことだけをお話して置きませう。

樵夫の娘（二場）

人物

彌作　樵夫
おみの　彌作の妻
弓子　娘（十三歳）
權次郎　樵夫
おその　弓子の友
其他四名の村人等

第一節

ある北の國の大きな山脈の麓にある一村落、舞臺は樵夫の家の居間。室の中には大きな圍爐裡があつて太い木の根が燃えて居る。室の中は暗くすゝけてゐる。室の前の土間には臼や杵や藁束などが無雜作に散ばつてゐる。妻のおみのは爐傍で煮物をしてゐる。娘の弓子はやはり爐傍で繩をなつてゐる。

弓子。　お母さん、お父つさんは今日山へ行かないの？

おみの。　あゝ、もう今年は行かないだらうよ。

弓子。　お母さん、もう幾つ寢ると、お正月になるの？

おみの。　もう直きだよ。春になつたらみんなで町へ行かうね。そしてお前にもいゝ着物を買つてあげやうね。

弓子。　だつて、おそのや、およしは、もうみんな春の着物が出來てしまつたんだつて。己らつまらないな。春になつてから着物を買つたつて何にもなりやしないんだもの。

おみの。　それや、おそのや、およしの眞似は出來やしないよ。

弓子。　だつてつまらないね！

おみの。　みんな人間といふものには、身分相應といふことがあるからね。お前も早く大きくなつて一人前の仕事が出來るやうになりさへすれば何んでも買へるんだよ。

弓子。　然う。お母さん、自分で儲ければ何んでも買へるの？

おみの。　あゝ、然うだとも。

弓子。　お父さん、何處へ行つたんだらうね、お母さん？

おみの。　裏にでもゐるんだらう。きつと薪でも割つてるんだよ。

弓子。　（耳をそばたてゝ音を聞きながら）あゝ、然うだよ。鉞の音がしてゐる。己ら行つて見やうかな。

おみの。　およしよ。今朝から幾ひろ、幾ひろもなはないぢやないか。

弓子。　（無言のまゝ繩をなふ。）

（この時、近所の少女おそのが土間に入つて來る。）

おその。　（幾らかいゝ着物を着てゐる。）伯母さん、今日は。

おみの。　今日は、お前さんいゝ着物なんか着て何處へ行くの？

おその。　（嬉しさうに。）伯母さん、町へ行くの、家のお父さん町買ひにつれて

行つて呉れるつて。

弓子。（羨しげに仕事の手をやめて。）いゝね。町買ひに行くの？

おその。（自慢さうに。）己らに春の着物はあるんだけれども、お父さん新しい羽織を買つて呉れるんだつて。

おみの。然う、いゝね。

おその。（弓子に。）弓ちやんも、己らと一緒に行かない？

弓子。（立上り。）己らも行きたいな、行きたいな！（母に。）お母さん、行つてもいゝね。己らお父さんに聞いて來やう。

おみの。お父さんに、そんなことをいつて御覽、お前ひどい目に逢うよ。

（おそのに）折角だけれども、おそのさん、家では大變忙しいんだから弓子はやれないよ。

おその。だつて伯母さん、一寸町へ行つて來るだけぢやないの。

樵夫の娘

おみの。　それでもお父さんやかましいんだからやれないよ。お前さん一人で行つておいでよ。

おその。（失望して。）然う、それぢや行つて來るわ。弓ちやんお土産を買つて來てあげやうね。

（おそのは去る。弓子は眼に涙を一杯溜ておそのの方を見送る。）

弓子。お母さん、つまらいね！

おみの。　何がつまらないことがあるもんか。さあ、早く縄をおなひ。

（弓子は暫く無言のまゝ縄をなふ。その時父は裏口から顔を出す。やがて土間の中に入り、何かを探してゐる。）

おみの。（早言に。）お前さん、何を探してるの？

父。　細引を探してるんだが、お前見なかつたかへ？

おみの。　細引なら土間にかゝつてるよ。（指示す。）そら、そこに。

父。（細引を發見する）あゝ、こゝにある。

おみの。　だけれども、お前さん細引をもつて何處かへ行くの？

父。　山へ行つて來るつもりだ。

おみの。　まだ山へ行くの？　もうおよしよ、他の人達だつてもう大抵休んでるぢやないの？

父。　うむ。もう大抵休んでるけれども、もう一稼ぎしないぢや、この年は越せねいや。弓だつて見ろ、その着物一つぢや何んぼ何んでも可愛相だ！今己ら裏の家のおそのに逢つたが、弓のことが思ひ出されて己ら涙が出た！　同じ人間ぢやないか、何うせ二本の腕で稼ぐんだ！　貧乏するばかりが能ぢやねいや！

おみの。　それや最もだけれども、貧乏は己らも慣れてるから何んなにも我慢はするよ。無理なことをしてお呉れぢやないよ。

父。　なに無理なことをするもんか。あの稲荷樣の上の樹を一本切ればいゝばかりだ。權次郎なぞに任せて置いたが、氣になるから、一つ己ら行つて見て來る。

おみの。　然う。だけれども、己ら何んだか夢見が惡いんで氣になるんだよ。

父。　馬鹿！　樵夫にそんなことあ禁物だ！　さあ、己ら行つて來るぞ。弓明日己らもお前を連れて町買ひに行かあ！

（父は幾ひろも捲いた細引を肩にかけ、右の腰に南蠻をさげて勇んで家を出る。妻と弓子は無言のまゝ立つて父を見送る。弓子の顏には希望の光が輝いてゐたが、妻のおみのの眼には涙が一杯溜つてゐた。遠く鷄の鳴く聲がする。

第二節

（弓子の父が山へ行つてから三時間ばかり經つてゐる。短い冬の日足は早くも暮れて、家の中は圍爐裡の火で幽に照されてゐるばかりである。）

おみの。　もう、暗くなつてしまつたね。お父さん何うしたんだらうね？

弓子。　ほんとにお父さん何うしたんだらう。道でも迷つたんぢやないかしら？

おみの。　（笑ひながら、）馬鹿なことをいふんぢやないよ。お父さんが道を迷つて何うするもんか！

弓子。　然うね。だけれども何うしたんだらうね、お母さん？

おみの。　（立つて、土間の方からランプを出して圍爐裡の岸元に吊して、マッチをすり、火を點す。室の中が急に明くなる。）室の中が明くなると溫かいやうな氣がするね。御飯の仕度くも出來てゐるのに、お父さん何をしてゐるんだらうね？

弓子。　お父さん早く歸つて來るといゝのにね。

おみの。　弓子お前お腹が空いたらう？

弓子。　あゝ、お腹が空いたけれどもお父さんもお腹が空いたらうと思つて。

おみの。　御飯も持たないで山へ行くなんて何んて向う見ずな人だらうね！

弓子。　でも、お父さん、きつとお金を持つて來るよ、そして己らと二人で町買ひに行くんだ！　いいね。

おみの。　弓子、お前お腹が空いたら先に御飯を食べておしまひ。（鍋の蓋を取る。鍋の中から黄色味を帶びた湯氣が上る。）　お膳をお出し。

弓子。　だつて、一緒に食べた方がいゝよ。お父さん直き歸るから。己らばかり食べるのはいやだ。

（この瞬間家外の方で人々の話聲がする。二人は急に耳をそばだてる。）

おみの。　お父さん、歸つたんだよ。きつと然うだよ。

弓子。　あゝ、お父さんだ。（立つて土間の方に行く。）お父さん！　お父さん、お母さん、お父さんぢやないやうだよ。大勢ゐるやうだよ。

おみの。　（土間の方へ行き、要心深く外を見すかしてゐる。）誰です？　お父さんぢやありませんか？

（この時樵夫仲間の權次郎が提灯をさげて中に入る。其直ぐ後に四名の村人が重い物を載た戸板をかついで中に入る。）

おみの。　（直覺的に、）お父さん！　お父さん！（狂氣のやうに泣いて、戸板に手をかけやうとする。）　權さん、夫では何うかしたのですか？　まあ、何うしたんでせう？

權次郎。　（聲を低めて、）おみのさん、氣を靜めてください！　實はかうなんです。彌作さんが樹を切つてしまつて下へ降りる時、腰に捲きつけてゐた細引が切れて十間ばかりのところから落ちたんです。何に普段なら切れるやうな細引ぢやないんですが、何ういふ譯だか今日に限つて切れてしまつたんです。

おみの。　それで、夫ではもう死んでしまつたんですか？

權次郎。　いや、死んでしまつたといふ譯ではないが、何しろ下が一面の岩

だから餘程痛んでゐやしないかと思ふんですがね。

おみの。（彌作の額に自分の額をあてるやうにしながら、）お前さん！　お前さん！

權次郎。（おみのをとめる。）およしなさい、およしなさい！　今、いゝ鹽梅に寢ついてゐるところだから。

おみの。でも、このまゝにして置けば夫では死んでしまうかも知れません村には醫者もゐないし、あゝ何うしたらいゝだらう！

權次郎。おみのさん、大丈夫だよ。今夜一晩かうして置いても、死ぬやうな氣遣ひはないから安心してゐらつしやい。朝になると、町までつれて行くから。

おみの。それでも、權さん、一寸でも私醫者に見てもらひたいんだけれども誰か醫者を迎ひに行つて呉れる人がないでせうか？

權次郎。今も其話をしたんだけれども、何しろ今から町へ行くと夜中になるし、夜中にこんな山中へ來て呉れる醫者もあるまいし、よしんば來て見たところが何うせ朝になるんだからね。

村の人。それに車か馬でも向けられる身分だといゝが、此方とらぢやいくら醫者だつて見向きもしませんや。

第二の村人。それより朝まで寢かして置いて、病人の模樣を見て町へつれて行くんだね。それが一番いゝや。

村の人。まさか死ぬことはあるまいとは思ふが、何しろ下が下だからね。

おみの。（いら〳〵して、）あゝ、何うしやう？　何うせ死ぬものにしても醫者に見せてから殺したい！

（この科白の中に弓子は無言のまゝ土間に出て行く。他の人々は氣附かずにゐる。）

弓子！　弓子！　おや、あの子は何處かへ行つたやうだ。弓子、弓子！

（他の人々も初めて氣がつく。急に娘を探し初める。）

權次郎。（土間の方をすかして見ながら。）今こゝにゐたんだが何處へ行つたんだらう？

村の人。あの子の氣性だからこれや、醫者を迎ひに行つたかも知れないぞ。

おみの。（直覺的に、）然うです、然うです、弓子は町へ行つたんです！　あゝ何うしやう！

村の人。（決心して、）よし、それぢや私は後を追つかけてあの子を返して、立派に醫者を呼んで來ませう！　おみのさん、安心しておいでなさい！

權次郎。そんなら、賴んだ、早くして呉れ！

（村の人は急いで出發する。この時病人は長い呼吸をする。みんな喜ばしさうに病人を見る。）

――靜かに幕――

幸福の鐘

昔、あるところに一人の商人がありました。もとこの商人は、大變貧乏な家に生れた人間で、子供の頃から、色々な苦勞をして育つて來ましたが、三十歳の頃には、やう〳〵のことで一軒の店を持つて、自分一人で商賣が出來るやうになりました。そこで、この商人は人間の幸福といふことに就て考へました。一體人間の幸福といふものは何ういふものだらう？　商人は子供の頃から今までの自分の歩いて來た道を考へると、自分はいつでも人に使はれ人に侮られてばかり暮して來たが、それといふのも、皆な自分に金がなかつたためだ。金さへあれば、何んな事でも出來る、何んな物でも手に入れることが出來るのだ、あゝ金さへあれば、この世の中は幸福に暮して行ける、かう商人は考へたのでありました。

『然し、金を儲けるのは中々容易なことぢやない。何うしたら、人より多く金が儲かるだらう？』

商人は色々考へた末、自分の知つてる金持の事を調べて見て、その人達のした通りに習つてしたならば、自分も何年かの後には、その人達のやうに金持になれるだらうと考へました。それから商人は、もし澤山の金持の儲方を考へ合はせて、その内で一番いゝ方法を用ひたら、或はその金持達の誰よりも一番金持になれるかも知れないと考へました。

『いゝ事が考へついた！　いゝ事が考へついた！』

と商人は一人で喜んで、商賣の傍ら、町を歩き廻つて、金持の人に逢つて今迄の苦心談を聞いたり、また町の老人達から、金持達の昔話なぞを聞いたりしました。然ういふ金持達の中には色々の人がありました。茶賣商人を四十年もやつて、百萬長者になつた人もあれば、駄菓子屋を開いて、二三十

年の内に澤山の田地、田畑の持主になつた人もあれば、また戰爭の時に、僅かばかりの軍用金を殿樣に用立てたゝめに、平和になつてから、何百倍の金を儲けた百姓もありました。然しその人達の内幕に入つて探つて見ると、大抵人に知れない惡い事をしてゐます。貧乏人に金を貸して、その金の抵當に家屋敷を取りあげたり、少しばかりの金に、澤山の利をかけて貸したり、中には人を殺して金持になつたものさへありました。商人は然ういふ事を聞いて、一時は吃驚はしましたが、色々考へた揚句に、

『なるほど、同じ人間に生れて、人より一倍金を儲けて、人に尊敬されるためには、並大抵の事ぢや、出來るもんぢやない。己れは餘り正直すぎたやうだ。正直にしてゐちや、一生浮ぶ瀬がない。他人の迷惑や、他人の噂さを氣にしてゐちや、一生人の下に立たなければならない。何に、人を殺したり、盜賊を働いたりさへしなければ、何んなことをしたつてかまふもん

か！』

と、考へるやうになりました。

この商人は、それから十年位ゐの間に、町でも可なりな金持になりました店を大きくしたり、田畑を澤山手に入れたりして、今では何の不自由もない身分になりました。然し何ういふ譯だか、いつでも、不安心で、氣持が焦々して、少しも幸福ではありませんでした。

商人はある時考へました。

『これ位ゐの金を儲けたゞけでは、いつ無くなるか知れたものではない。せめてこの金の五倍も溜つたなら、安心になるかも知れない。そのためにはこんな小さな國の中だけで商賣してゐるのでは、いつまで經つても同じことだ。一層旅へ出て儲口を探して來やう。』

この事を自分の妻にも打開けて、方々日本國中を歩き廻はりました。京都

や大阪では、色々の大きな商人に逢つて、商賣の話をしました。何處へ行つても、自分の店よりも大きな店があつて、店には自分の店より何十倍も品物があつて、商賣も繁昌してゐます。それを見ると、商人は益々不安心になつて來ました。

商人はある時妙な事を聞きました。それは、無間寺といふお寺の鐘を撞くと、其人は幸福になつて一代の内に大變な金持ちになることが出來るといふことです。然し、このお寺では、この鐘を誰にも撞かせないといふことです。商人は、自分はこれから一生涯働いたとて、京大阪の商人に匹敵するほどの金持になることが出來ない。一層その誰も撞いたことのない鐘を撞いて、一代の金持になりたいものだと考へました。

商人は、ある日このお寺へお詣りして、住職の僧侶に逢ひ、

『何うか、鐘を撞かせてください。』

とお願ひしました。

住職は驚いて答へました。

『この鐘を撞くことだけは、およしなさい。この鐘は昔から誰も撞くことが出來ないことになつてゐる。』

『それは、私も知つて居ります。それだから、私は尙更ら撞いて見たいのです。』

と商人は言ひました。

すると住職は、

『お前さんは、何にも知らないのだ。昔から此の鐘を撞くものは、一代の内に百萬の富を得るけれども、其代り、その人間は未來には、無間地獄といふ、地獄の中でも一番怖しい地獄へ落ちて行くし、また現世では一族の子孫が死絶えることになつてゐる。鐘を撞くことはお止めなさるがいゝ。』

と言ひました。

『實は私はその百萬の長者になりたいのです。私は現世で百萬長者になりさへすれば、死んでから地獄へ落ちやうが、そんなことは何うでもいゝのです。兎に角、私はお金を澤山に儲けて幸福を得たいのです。』

と商人は答へました。

そこで、お寺の住職は、商人を池の方へ連れて行つて、一掴みの燒米を池の中へ投げてやりました。すると何千萬疋といふ水蛭が水の表面へ浮び出てその餌を爭ひ取らうとします。青い藻を浮べた池の面が、忽ちの内に戰場のやうになつてしまひました。

住職は、商人に向つて言ひました。

『人間の利を爭ふ樣は、皆なこのやうなものだ。これは現世の地獄だ。またお前さんの死んだ後、地獄の鬼供が、ちやうど燒米を爭ふ水蛭のやうに、

お前さんの周圍に集つて來て、お前さんを苦しめるのだ、お前さんは現世では他人を苦しめ、未來では自分が苦しむのだ。それが可哀相なので、このお寺では、誰にも鐘を撞かせないことにしてあるのだ。』

然し、たゞ利益にばかり眼の眩んだこの商人は、住職の言ふことには、一向耳をかしませんでした。

『私は未來といふものを信じません。未來に何んなことがあらうとも、それは私達の關係したことではありません。何うか鐘を撞かせてください！』

と言つて承知しません。

住職は、つく〴〵この商人の顏を見てゐましたが、商人に向つてかう言ひました。

『お前さんの顏を見ると、お前さんは、この現世で金銀を吸ひ取る性質を、生れながらに持つてゐるのだ。お前さんは鐘を撞かないでも、大金持にな

れる人相を持つてゐる。もし、現世で金持になれさへすればいゝといふのならば、一生懸命に金を儲けるがいゝ。』

商人は、嬉しさうな顔をして、言ひました。

『私はほんたうに、金持になれるでせうか？』

『あゝ、きつとなれる。もし、金持になれなかつたら、またお寺へ來るがいゝ。その時には鐘を撞かせてあげやう。』

商人は、雀躍りして、住職に別れを告げて歸りました。

それから旅行を終へて、自分の商賣を營んで見ると、何から何まで好都合に行つて、商賣は驚くほど繁昌しました。忽ちの内に、商人は町で一番の金持になりました。

今迄この商人を馬鹿にしてゐた、京大阪の商人は、喜んでこの商人と取引きをすることになりました。

商人はお金の出來次第、田畑、家屋敷を買占めて、今では日本中でも名高い金持になつてしまひました。

然し、商人は若い時に考へたやうな『幸福』といふものは、何うしても得られませんでした。

その内に、若い時から一緒に働いて來た妻が、一寸した病氣に取りつかれて、十日ばかり臥つてゐる内に、死んでしまひました。

商人は十人の醫者を呼び、金に飽かして看護に努めたけれども、妻の生命を取り止めることは出來ませんでした。

又その年の秋には、可愛い二人の娘に死なれてしまひました。

妻に死なれ、二人の娘に死なれた商人は、もう生きる張合ひもなくなつてしまひました。

そして其翌年の夏、商人自身も、病氣になつて死んでしまひました。何百

萬といふ金を遺したまゝで……。

そして、商人の遺して行つた金のために、商人の兄弟達は、長い間爭つてゐました。

フロリーズの話

一

この物語は、フランスの名高い文學者が、自分の教子であつた一人の王子にお話した物語です——

ある百姓のおかみさんが、近所の森に住んでゐる一人の魔女と懇意にしてゐました。ある時おかみさんは、お産をするやうになりましたので、その魔女に來て貰ひました。

生れた赤ん坊は女の兒でした。すると魔女は、赤ん坊を兩手に抱き上げておかみさんに向つてかう言ひました。

『この子は世界一の美しい賢い娘さんになつて、偉い王樣の妃になる事が出來るけれども、そのかはり不幸な目に會はなければならない。それとも、

お前さんのやうに貧乏な、不縹緻な百姓女で一生を終はれば身分は低くとも、幸福に樂しくその日を暮してゆける。何方でもお前さんの望み通りにしてあげやう。』

すると、おかみさんは、一寸困つてしまひましたが、可愛い娘を、少しは不幸な事があつても、立派な王妃にしてやる方が自分のやうに貧乏な百姓にするよりは、幾ら良いか知れないと考へたので、魔女に向つて、赤ん坊を美しく賢くしてくださいと賴みました。そして生れた赤ん坊にはフロリーズといふ名をつけました。

大きくなり次第、このフロリーズは段々美しくなつて行くばかりです。いやその姿ばかりではなく魂もまた美しく、優しく、清らかで、そして親切になつて行きます。そして人から敎つたことは何んなことでも、一度でちやんと覺え込んでしまひました。

お祭なぞの日は村の娘達は、皆な青々とした草の上で樂しく踊り狂ひましたが、フロリーズほど上手な者はなく、また歌を歌へば何んな樂器の音も打ち消されてしまふほどでした。その上フロリーズは、自分で色々な歌を作つて面白く節付けする力がありました。

ですが、このフロリーズは自分の美しいといふことを少しも知らなかつたのです。ところが、或日お友達と一緒に、ある清らかな水のほとりで遊んでゐた時、ふと水に寫つた自分の姿を見つけて、初めて自分の美しいのに氣がついて驚きもし、喜びもしました。

村の人達は皆な、フロリーズの美しい姿を見やうとして、用もないのに、わざ〳〵訪ねて來たりなぞしました。母親は魔女の言葉を思ひ出して、娘はもう王妃になつてしまつたやうに喜んでゐました。そのために母親はだんだんこの娘を甘やかして行つて、フロリーズは絲を紡ぐことも、縫ひ裁ちもせ

ず、また羊の番もせず、毎日花を摘んで美しく髪を飾りたてたり、唄つたり踊つたりしてばかり日を送りました。

二

話かはつて、この國の王樣は偉い方で、そのお方にロジモンドといふ一人の立派な王子がありました。この王子はもはや年頃になりましたので、お妃樣を迎へねばならなくなりました。

ある時、一人の魔女が宮城へやつて來ました。そして言ひました。

『王妃になる方は、何處の國の王女達よりも美しい田舍娘ですから、決して他國の王女なぞをお貰ひになつてはいけません。』

そこで、王樣も王子も、あちらこちらから申し込んで來る結婚の申込を、一々斷つておしまひになりました。そして國中の十八歳以下の娘を全部集めて、魔女の言つた一番美しい娘を探すことになりました。

その日には、國中の若い娘達が、後からと數へきれないほど宮庭に集つて來ました。その内から役人は三十人の最も勝れたものを選んで後に殘して、他のものは歸へしてしまひました。——美しいフロリーズがその中に入つてゐたことは勿論のことです。

皆なとり〴〵に美しい中にも、フロリーズは亂れ咲いた金盞花の中に、たつた一つ丈けの、靜かに優しい姿のアネモネの花、野荊の群にたつた一本香ばしい匂の橙の花とも思はれるほど、美しく人目につきました。

王樣は早くもフロリーズの姿をお見つけになつて、

『わが王子の妃となるものは、この娘より外にないぞ！』

と仰せになりました。

そこで、フロリーズは、汚ない田舍娘の服を脱がされて、眼も眩むほどの美しい、黄金の刺繍をした衣服を着せられ、全身に眞珠やダイヤモンドの珠

を飾られ、とても口や文章では言ひ表はしきれないほど立派な室に導かれました。この室は美しいばかりではなく、王子ロジモンドが、何處からでも美しい妃の姿を見られるやうに、四方の壁が鏡で出來てゐました。

やがて、王様はお失くなりになりましたので、王子ロジモンドは新たに王の御位に即かれ、美しいフロリーズもまた王妃の冠を戴くことになりました。この王妃はよく王様のお仕事を助けたので立派な王妃として下々からも尊敬されました。このお二人ほど幸福な人は世にまたとあるまい、と思はれるほど仲のいゝ御夫婦でした。

ところが、こゝにロジモンド王の母君のグロニポートといふお方は、大變に顔の醜い、そして意地の惡い人でしたが、自分の顔の醜いところへ、世に稀れな美人のフロリーズが來たので、グロニポートの醜さが一層際立つて見へるのでした。然しこれは極めて自然なことで、誰が惡いといふことでもな

フロリーズの話

いのに、母君グロニポートにはフロリーズが憎くてたまらないのです。

とうとうある日、グロニポートは王様に向つて、

『そなたは、何故あのやうな身分の低い卑しい田舎娘を妃に迎へたのであらう。愚かしいにも程がある。第一あの娘は高慢で、自分がまるでこの御殿にでも生れた人間のやうに威張り散してゐます。それに較べると、そなたの父上は偉い方で、身分に相應した王女の私を妃にされました。私は歴とした王女なのです。兎に角そなたはあの賤しい田舎娘を歸して、身分のある王女を貰はなければなりません。』

と親の權利を楯にして無理なことを言ひだしました。今まで一度も親に逆つたことのないロジモンドも、この言葉には何うしても從ふわけにはいきませんでした。太后の御機嫌は益々惡くなるばかりです。

三

ある日、太后は御殿の廊下で、一通の手紙を拾ひました。その手紙はフロリーズがロジモンド王様に自分の誠意を表はしたものですが、家來が王様の所へ持つて行く途中で取り落したのです。太后グロニポートはこの手紙を種に、大變惡い事を企みました。太后はフロリーズの手紙の宛名を、若い一人の家來の名にして王様に見せました。

正直な王様は、この手紙を見て烈火のやうに怒つて、何もいはずに、太后のすゝめに從つて美しいフロリーズを淋しい塔の中へ閉ぢ込めてしまひました。その塔は、海の中に聳へてゐる、大きな岩の上に建つてゐるのでした。

フロリーズは身に覺えのないことですから、何うしてロジモンド王様が自分をかういふところへ押し込められるのだらうと思ひながら、毎日〳〵たゞ泣いてゐるばかりでした。そしてフロリーズの世話役の一人の老婆は太后グロニポートの命令で、毎日〳〵この可哀さうなフロリーズを責苛みました。

ふとフロリーズは長い間忘れてゐた、自分の田舎の生活を思ひ出しました——粗末な、然し平和な荒屋！　唄つたり踊つたりして遊び暮した樂しい野原！　さういふ平和な樂しい田舎の生活を思ふと宮殿の中で、今自分がこんなつらい情ない生活をしてゐることが一層悲しくなつて、なぜ、お母さんが魔女にあのやうなことを賴んだかと今更らのやうに怨しく思ひました。するとその時に世話役の老婆が來て、首切り役人がお前さんの命を取りに來るから其覺悟をしてゐろといひました。フロリーズは、私はもう既うにその覺悟をしてゐると答えました。

とう〳〵最後の日が來ました！

幅の廣い、見るから氣味の惡い首切刀を携げた首切役人がフロリーズの室へ這入つて來ました。美しいフロリーズの生命は、風の前の燈火と等しいものになりました。ちやうどその瞬間に一人の女が太后の命令によつて、フロ

リーズの死ぬ前に二言だけ祕密に言ひ傳へることがあると、言つて來ました。そこで老婆と首切役人とはフロリーズを殘して室を出て行きました。この女は太后の侍女に扮してゐる魔女なのです。そして魔女はフロリーズの耳に囁きました。

『お前さんをこんな悲しい目に逢はすのはみんなお前さんの「美しさ」だ。お前さんはその「美しさ」を捨てゝ、粗末な衣服を着て田舎へ歸へる氣はないか？』

フロリーズは夢ではないかと喜びました。そして早速魔女の申出に同意しました。

魔女がフロリーズの美しい顏に不思議な面をかぶせると、見る〳〵フロリーズの顏が曲んで、筋肉が腫れ出して、二目と見ることの出來ないほどの醜い女になつてしまひました。やがて老婆の案内で、首切役人や檢死の役人が

室へ這入つて來た時には、フロリーズは醜い一人の田舍娘になつて誰にも氣つかれずに塔を出て行きました。

フロリーズは懷しい生れ故郷の片田舍へ歸つて行きました。

フロリーズを見失つた役人達は、八方に手を廻はしてその行衛を探させましたが、何處にも見當りませんでした。

フロリーズは、片田舍で、羊の番をしながら、貧しい淋しい生活に滿足して暮ました。

彼女は毎日毎日、不幸な王妃の物語をきゝました。やがて、この物語は流行歌になりました。フロリーズは友達と一緒にこの歌を歌つてその歌に泣かされました。然し自分がその歌の主人公とは誰にも言ひませんでした。

戯曲

牧神と羊の群

登場する者

牧神　白い髪、白く長い鬚、腰には獸の皮を卷き、手に太い杖を持つてゐる。

草の精　大せい、美しい少女。

羊の群　頭に羊の冠を戴いてゐる。少年によつて扮せられる。

馬の群　頭に馬の冠を戴いてゐる。やゝ大きな少年によつて扮せられる。

牛の群　頭に牛の冠を戴いてゐる。これもやや大きな少年によつて扮せられる。

第一場　秋の朝

第二場　午後―夜
第三場　晴れた朝

これは北國の湖に添うた、ある大きな牧場の出來事である。そこには、年とつた牧場の神樣が五十匹の羊と六十頭の馬と、四十頭の牛を飼つてゐた『牧場の神樣』は、毛皮を腰に卷いて、いつでも大きな太い曲りくねつた杖を持てゐる。年が幾つになるのか誰も知らない。またいつどこから來たのかも知らない。牧神は、ちよつと見ると大へん氣樂で毎日遊んで暮してゐるやうであつたが、なか〳〵さうではなかつた。五十匹の羊、六十頭の馬四十頭の牛を見守つてやるためには、並大抵の苦勞ではなかつた。

第一場（朝）

廣い牧場の少し小高い丘の上。夏のをはり、秋の初めの野原には草は伸びられるだけ伸びて、そして葉の一片毎に銀の玉のやうな露が浮んでゐる。

正面の森の中では、小鳥が枝から枝へ飛び跳ねて、朝の歌をうたつてゐる。

牧神（森を背にして、石の上に腰をかけてゐる。）みんな子供等は起きて遊んでゐるな、あの沼池の上に牛の奴等は草を食べてゐるし、馬の奴等は溪の上を面白さうに跳び廻つてゐる。あの弱蟲の羊までが小さな尻尾を動かして草の上を駈け出してゐる。ああ、今太陽が登る。湖の波が燃えてゐるやうだ。櫨の木も榛の木も、みんな一度に呼吸をしてゐる。子供等はみんな仲よくして遊んでゐる。私は夜の見とりで少しばかり疲れたやうだ。こゝで一眠りするとしよう。

（牧神はかういひながら、石に腰かけたまゝ眠つてしまふ。やがて森の蔭の方から「草の精」の歌が聞えて來る。）

草の精の歌（十三四歳の少女の聲。）

照る〳〵お日様、
眞ッ赤な〳〵お日様、
金の冠に銀の杖。

くる〳〵廻れ、
牧場の姫子、
赤い冠に青い裾。

照る〳〵お日様、
眞ッ赤な〳〵お日様、
金の冠に銀の杖。

くる〳〵廻れ、
牧場の姫子、
短い命の果てるまで。

照る〳〵お日様、
眞ッ赤な〳〵お日様、
金の冠に銀の杖。

くる〳〵廻れ、
牧場の姫子、
冷い小霜の降りるまで。

（この歌のなほる頃、六人の「草の精」は牧神の前に現れる。）

草の精の一　（靡をひそめて）御覽なさい、叔父さん、もう眠つてゝよ。

草の精の二　あゝ、眠つてゐるわね。

草の精の三　叔父さんは、きつと草臥たのよ。あんなに夜遲くまで牧場中を歩き廻つてゐるんですからね。

草の精の一　ふだん見るとあんなにこはいやうな顏をしてゐるけれども、眠つてゐるとほんとにやさしい顏をしてゐるのね。

草の精の四　ほんたうにね。この叔父さんは、幾つになるんでせうね。

草の精の一　幾つになるか誰も知らないのよ、あの瀧の上の樫の木に聞いたら己の子供の頃に叔父さんはやつぱり今と同じやうに眞ッ白な鬚を生やしてゐたと言つてたのよ。

草の精の五　さう？　それぢや大へんな歳でせうね。

草の精の一　さうね。あの樫の木は八百年になるといふから、もう千年位生き

てゐるのかも知れなくつてよ。

草の精の六　私はそれ位にはなると思つてよ。湖の叔母さんの話では、叔父さんは叔母さんの生れる前からこの邊にゐたんですつて。

草の精の一　そして叔母さんは幾つでせうね。

草の精の六　叔母さんには、自分の歳が分らないんですつて。私位の年配になると、自分の年なんてものは分らなくなるんだッて叔母さんが言つてよ。

（一同は輕く笑ふ。）

牧　神　（この時少し身うごきをする。）

草の精の一　（一同に）叔父さんは草臥れていらつしやるんだから起さないやうにしませうよ。みんなで「眠り」の歌をうたつてあげませう。

叔父さん〳〵いゝ叔父さん、

ねん〳〵ころり、ねんころり。
黄いろな夢や青い夢、
夢のお國のお土産には、
赤い太陽に露の玉、
ねん〳〵ころり、ねんころり。

（草の精は手に〳〵秋の草花を持つて、靜かに牧神の前に舞ひながら靜かに去る。）

第二場（午後）

前の場面と同じ場面、太陽が傾きかけてゐる。牧神はまだ石に腰かけたまゝ眠つてゐる。この時、丘の下の方で互に言ひ爭ふ聲が聞える。土を打ち石を投げる音がする。

牧　神　（靜かに目を開いて、その方を見おろす。そして悲しさうな顏をする。）また子供等は喧嘩を始めたな。馬鹿な奴等だ。みんな湖の岸から山の上に登つて來る。

あのトンマな牝牛の奴までが血眼になつて荒れ廻つてゐる。子馬は何にも知らずに、夢中になつて溪の上から石を投げつけてゐる。この廣い綠の野原に住んでゐながら、何が不足で喧嘩をするのだらう。

（この時、牛の群と馬の群との爭が聞える。）

馬鹿な奴等だ。あいつ等はあいつ等相應な理窟を言つてゐるわい。

（間もなく三頭の牛と三頭の馬が舞臺にあらはれる。）

牧　神　（悲しみを隱すやうに微笑を浮べて）一たい、どうしたといふのだ。

牛の一　（頭を下げながら）どうぞ、あなた樣、聞いてくださいまし。あの大喧嘩以來、私どもは、なるたけ喧嘩をいたしたくないと思ひまして、我慢に我慢をしてをりましたが、この馬の仲間が、あんまり亂暴なことばかりいたしますものですから、つい……。

馬の一　（同じく頭を下げて）いえ、どうぞ、聞いてくださいまし。亂暴なことをいたしましたのは、私どもではございません。奴等こそ不屆なことをいたす奴でございます。

牧　神　一たいどうしたといふのだ。お互にさう言ひ張つてゐるばかりでは、さつぱり譯が分らないではないか。（牛の一に向ひ）一體どうしたといふのだ

牛の一　實は、けさ、私どもが朝早く起きて小川の水を飲まうといたしますと水が泥で眞ッ赤になつて、とても飲めさうにもないのでございます。そこで、私どもが何氣なく山の上を見あげますと、馬の奴等がみんなして、小川に石を投げたり、崖を崩したりしてゐるのでございます。

牧　神　（馬に向ひ）お前達は、なぜそのやうなことをするのだ。

馬の一　實はその小川は私どもの小川で、もとは、その小川に添うて湖のところまで下りて行かれたのでございますが、牛の奴等は柵を越えて、私どもの水を飲みに來るのでございます。牛の奴等こそ亂暴な奴等でございま

す。

牛の一　いえ、あなた様、お聞きくださいまし。あの小川の縁は五六年前あなた様のお立合ひの上で、あの可哀さうな羊の奴等に讓つてやつたところでございます。（懐から地圖を出して）この地圖を御覽くださいまし。こゝにちやんと印がつけてございます。

馬の一　（忙き込みながら）それならば、なぜ桐を越えて他人のところの水を飲みに來るのでございませう。私はあの羊の奴等が可哀さうでなりません。

牧神　（悲しげに双方を見て）お前達のいふことはよく分つた。さういふ話を聞くと、私は寂しい氣持になる。私はまだお前達が赤子の頃から、心配をしい〳〵けふまで育てゝ來た。お前達は赤子の頃は、誰も彼も仲よくして、この野原で遊んでゐた。私はそれを見て、いつでも喜ばしく思つてゐた。併し私は、いつかかうしてお互に喧嘩をするやうになるだらうとは思つて

ゐた。いや、お前達の親達の時代から、私にはそれがちやんと分つてゐたのだ。お前達は知らないけれども、お前達の先祖はあの山の蔭にゐたのだ。あすこは燒け山で、草も木も餘り生てゐなければ、このやうな美しい小川もなかつた。お前達の先祖は、それでも、仲よくして一生懸命に働いてゐた。私はそれが可哀さうだと思つたので、お前達の先祖を、この廣い綠の野へつれて來てやつたのだ。ところが、お前達は、自分のい〳〵性質を少しも發達させないで、一番惡い性質だけを發達させて來た。私はもうお前達には用のない者になつてしまつた。（と言ひながら立ち上ろ）

（牛と馬とはあわてゝ牧神を留めようとする。）

お前達の先祖をこゝへ連れて來た時は、私はお前達がもつとよくなるだらうと思つてゐた。お前達には外の動物の持つてゐないものがある。一つは「智慧」で、一つは「感情」だ。世の中には、お前達より、もつと強い者

が幾らもゐる。併し、さういふものにはお前達の持つてゐるやうな美しいものがない。あの獅子を御覽、虎を御覽、熊を御覽。またあの象を見るがいゝ。あれ等は、お前達よりどれだけ強いか知れない。しかし、あゝいふものはみんな自分で亡んで行つてしまふ。力のあるものは、自分の力で自分を亡してしまふのだ。

（この時、丘の下の方で、大ぜいのものゝ罵りあふ聲が聞える。）

馬の一　あれ、あのやうに私どもの兄弟がみんな死身になつて爭つてをります

あなた樣のお說敎も御尤もでございますが、私どもには、この際どうしようもないのでございます。

牛の一　一たい私どもはどういたしたら宜しいのでございませう。

（牧神は絕望的に双方を見る。）

牧　神　そんなら、行つて爭ふがいゝ。そしてみんな亡んでしまへ。力を誇るものは自分の力で自分を亡すだけのことだ。

（牧神は寂しく言ひ放つて、席を立つてゆく。）

馬の一　どうぞお許しくださいまし。今度一度きりで、私どもは、永久に爭はないつもりでございます。

牛の一　私ども、今度だけは全く爲方のないことでございます。どうかお許しくださいまし。永遠の平和のためでございます。

（牛馬の群は、双方、異なつた方向に走つて行く。この時、野も丘も、一面に夜となる。そして闇の中で永い間動物の爭ひあふ音が聞える。）

第三場（朝）

牧　神　（悲みの上に溫容を浮べて羊の群を見る。）ゆうべは恐しい晩であつた。お前達はよく怪我をしなかつた。あの馬鹿者どもは自分で自分を亡してしまつた。さぞ恐しかつたらうな。

羊の一　ほんたうにゆうべは恐しうございました。私どもはあの小さな柵の中に一塊になつてぶる〳〵慄へてをりました。

羊の二　それでも、こは〳〵あいつ等のするところを見てをりますと、それはそれは恐しいことばかりでございました。一方は溪の上から石や大木を投げつけてよこしますし、また野原からは牛の奴等が角を振り立てゝ無二無三に山を目がけて突進して行くのでございます。中には、横腹を敵の角に突かれながら、一緒に重なりあつて溪底へ落ちて行くものもあります。さうかと思へば、お互に取ッ組みあひながら、だん〳〵力が盡きて、そのまゝ息の絶えて行くものもございました。私どもの仲間にも、ずゐぶん怪我をいたしたものもございますが、まあ〳〵、それだけで濟んだといたします

牧神　と、爲合と申すものでございます。

牧神　さうだ。私は、ゆうべから、お前達のことを心配してゐた。しかし、

まづ無事でゐてよかつた。いつかお前達は私のところへ來て、なぜ私達にもつと強い角と鋭い牙を與へて下さらなかつたのかと言つて愚痴をこぼしたことがあつたな。その時私は、もしお前たちに「もつと強い角と鋭い牙があつたら、お前たちはもつと不幸になつてゐたらうと言つたことを覺えてゐるか、もしお前たちはもう少し強い動物であつたら、ゆうべのうちに、あの馬鹿者どもと一しよに血を流したり、溪へ嵌つたりして死んでしまつてゐたかも知れない。御覽、ちやうど、太陽が登るところだ。あの馬鹿者どもは、少しばかりの地面や、少しばかりの自分の利益のために、けふの太陽を見ないで死んで行つてしまつた。——可哀さうな奴等だ。

草の精　（森の中から歌ひながら出て來る。）

照る〳〵お日様、
眞ッ赤なお日様、

金の冠に銀の杖。

くる〳〵廻れ、
牧場の姫子、
赤い冠に青い裾。

照る〳〵お日様、
眞ッ赤な〳〵お日様、
金の冠に銀の杖。

くる〳〵廻れ、
牧場の姫子、

短い命の果てるまで。

照る〳〵お日様、
眞ッ赤な〳〵お日様、
金の冠に銀の杖。

くる〳〵廻れ、
牧場の姫子、
冷い小霜の降りるまで。

古戰場と柳

昔、日本の北の方に當る、ある城下に二人の男の子がありました。

一人は太郎といひ、一人は次郎といひました。二人の家は近所でありましたから、お互に毎日顏を合はせ、毎日仲よくして遊びました。二人は武士の子供でしたから、いつでも腰に木刀を差して、それを拔いては戰爭ごつこをして追つたり追はれたりして遊んでゐました。二人の遊び場所は城下の端の廣い野原でしたが、この野原では、殿樣はよく兵隊を集めて觀兵式のやうなことをなさいました。太郎と次郎はそれを見ては、いつでも『己れたちも早く一人前の武士になりたいな！』と思ひました。

その野原には餘り樹がありませんでしたが、ちやうど眞中頃に、たつた二本の樹が淋しさうに立つてゐました。この二本の樹の下には殿樣が時々お休

みになる時がありました。調練のない時は太郎と次郎はよくこの樹の下で擊劍をしたり、競走をしたりして遊びました。

二本の樹の一方は大きな樫樹で、何百年經つたか誰れにも知れないほどの大木で、枝がその高さほども擴がつて、野原の中に大きな陰影を造つてゐました。武士でも町の人でも、こゝを通る人はよく汗を拭きながら、みんなこの大木を賞めて行きました。

『まあ、なんていゝ樹だらう。何うしても五六百年にはなるだらう。』

『あゝ、いゝ風が吹く。お前があるので私達は何れ位ゐ助るか知れない。』

なぞと言つて行く人もありました。

この樫樹から十間ばかり隔つたところに一本の柳がありました。これも可なり古い樹と見えて、幹はぼこ〳〵になつて青い苔が一面に生へてゐました然し枝は誠に少くて、根元から二間ばかりのところに五六本と、三間ばかり

のところに二三本しかなかつたので、餘りいゝ格好ではありませんでした。ちやうど豚の尻尾のやうでした。然しその少い枝から大變に色のいゝ、綠色の若芽を出してゐました。もう今年は枯れてしまふだらうと、思ふとやつぱり春になると綠の芽を何處から出すともなく、吹き出して來るのです。

この柳樹は枝が少いので、誰もこの樹の下に休む人はありませんでした。然し柳樹にも柳樹の取柄がありました。武士が調練をする時、いつでも馬の手綱をこの柳の幹につないで置きました。また遠い國から旅をして來た旅人などは、この柳樹に馬をつないで城下へ入る仕度などをしました。または町から出て遠い旅をする人々もこの柳に馬をつないで、自分の生れた故郷をもう一度振返つて涙を流したりしました。

然し、それにも拘らず、誰も柳をいゝ柳だといつて賞めた人はありませんでした。

オ 古戰場と柳

太郎と次郎は今日も野原へ遊びに來ました。二人は木刀を振廻はして長い間撃劍の稽古をしました。二人は汗をびつしよりかいて樫樹の下へやつて來ました。

『涼しいね！』

と太郎は袴を脱いだり、懷へ風を入れたりしていひました。

『あゝ、こゝへ來ると、いつでもいゝ風が吹くね！』

と次郎は答えました。次郎も袴を脱いで稽古着一つになりながら答えました

『次郎さん、この樫樹は何百年位ゐになるだらうね？』

と太郎は次郎に話しかけました。

次郎は太郎と並びながら樫樹の根に腰をかけて、白いお城の見える城下の方を見ながら、

『然うだね、何百年になるだらうね。何んでも家のお父さんの話では、今の

殿様のお祖父様のそのまたお祖父様の代に、もう立派な大木であつたといふ話だから大變な年だらうね。』

といひました。

太郎は口の中で、次郎の口眞似をしながら、

『お祖父様のそのまたお祖父様……そんなに古いのかね！』

と眼を圓くしていひました。

二人は暫く默つて涼しい風を受けてゐましたが、やがて、太郎は口を開いて、

『それではあの柳は何年になるだらうね？』

『あの柳、あの禿柳かへ？　何年になるだらうね。だけれども、あんな柳はもうぢき枯れて死んでしまふだらうと思ふね。』

『でも、あんなに苔の生へてゐるところを見ると十年や二十年ぢやきかない

と思ふね。』

『然うかも知れないね。太郎さん、あんなきたない禿柳なんか早く伐つてしまつた方がいゝんだね。』

と次郎はいひました。

其翌年も其翌年も太郎と次郎はこの野原を遊び場にしました。そしてあの樫樹と柳樹は毎年の通り春になれば綠の葉を出して同じやうに野原の上に陰影を投げてゐました。

時の經つのは早いもので、太郎と次郎はもはや十八歳になりました。二人はもはや元服して立派な武士になつてゐました。二人は毎日大小を腰に差して城下の城へ出勤しました。お城は大きな濠に圍まれた小山の上にありました。

一人前の武士になつてからも二人はお城へ出る時は、お互に誘ひあつて行

くことにしてゐました。今では二人はあの野原の二本の樹のことなぞは全然忘れて暮しました。然し二人が十八歳になつた秋、紅葉の頃大きな戰爭が始まりました。太郎と次郎の勤めてゐるお城が四面から敵を受けることになりました。そして城下の武士は殘らず戰死してしまひました。その時太郎と次郎は城下の少年を集めて一隊の少年軍を組織しました。太郎は第一の隊長になり、次郎は第二の隊長として奮鬪しました。四面から城下へ攻め寄せた、敵の軍勢は、この二隊の少年軍のために、散々に惱まされて幾度も退却しました。太郎と次郎は實によく戰ひました。

然しとうと、衆寡敵せず、次ぎから次ぎと新手を替へて來る、敵に追はれて、この少年軍はある小高い山の上まで退却して來ました。太郎と次郎は、自分の率ひてゐた少年兵士達に『今こそ男らしく死ぬべき時である』と言つて、火に燒かれてゐる城下の方を拜みながら潔く切腹して死んでしまひまし

た。山の峽谷を流れてゐる小川の水は、そのために赤く染まつたといふことです。

この大きな戰爭の終へた後、一旦町から逃げて行つた町人や百姓達は、再び城下へ歸つて來ました。人々は城下へ入る野原のあの二本の樹のところへ來て見ました。すると、あの大きな樫樹は太い幹に無數の彈丸を受けて、枝は枯れ、葉は落ちて死骸のやうに淋しく立つてゐました。

『あゝ、この樫樹も、とうと死んでしまつたか！』

と人々は言ひました。

然し、樫樹の傍にあつた禿柳だけは、幹に無數の彈丸を受けてゐながらもやつぱり昔のやうに綠の葉を出して柔かな春風に枝を靡かせてゐました。然し誰もこの柳樹のことを注意して見るものはありませんでした。

その時からもう五十年ばかりの時は過ぎ去つてしまひました。滅された人も滅ぼした人も皆な昔の人です。そしてあの大きな樫樹は根元から切り取られてしまつて、やがてはその根も堀り取られて、その後に大きな町の小學校が建築されました。その小學校の門の傍に古い柳の樹があつて、少い枝に毎年綠の葉をつけてゐました。

王様の翼

——アルフアルート王とクラリフキーユの話——

昔、アルフアルートと云ふ王様がありました。この王様は、隣國の王様達からは非常に恐がられてゐましたが、自分の國の臣民達からは、大變に慕はれてゐました。

王様は賢くて、善良で、公平で、勇敢で、おまけに種々な事情に悉しく通じてゐられましたから、何を持つて行つても王様を困らす事は出來ませんでした。

或る日王様の許へ一人の魔女が來て、王様に、一つの指輪を差し上げ乍ら若しも王様が、この指輪をお用ひにならないならば、屹度不幸な事が起るちがひありませんと申しました。そして、指輪に欽つてゐる金剛石を指の内部の方へ廻すと王様の姿は見えなくなつて、それを外部の方へ廻すと、今度

は、元の様に、姿があらはれますと、説明致しました。

このたいへんに便利な指輪を貰つた王様の喜び方は、なか〳〵一通りではありませんでした。

若し王様が、ご家來のうちの誰かに對して、何か疑をかけられた場合には王様は早速、指輪の玉をくるりと内部へ廻しておいて誰にも見付けられずにそのご家來の室の中へ這入つて行かれました。そしていろ〳〵な祕密を、お聞きとりなさいました。又、隣國の王様が、どんなたくらみをしてゐるかを知りたいと思召したならば、早速姿をかくして、その王様のお居室の中まで忍んでお出でになりました。

このやうにして王様は、ご家來衆や臣民達が王様に對して抱いてゐる考へや、隣國の王様達のたくらみを、悉く、豫め知つておいて、そのうちで、王様に害を加へやうとするものがあると、反對に、こちらから對手を散々な目

にあはせました。

そのうちに王様は、どうもこれだけでは滿足が出來なくなりました。そして指輪を吳れた魔女に對つて、この指輪の效能はもつと速くもつと廣く利用したいから、少しの間に、思ふ所へ行く事の出來る方法を與へて吳れとお賴みになりました。すると魔女は溜息を吐いて、『王様、あなたは、あんまりお望みが過ぎます。このお望みはあなたのお爲にはなりませんから、思ひ切りなさつた方が、よろしうございます。』と申し上げました。でも王様は、お聞き入れになりませんで、しつこく魔女に賴まれました。

『では仕方ございません！』と魔女が、根負けをして申しました。『その力をお授け申しますが、必ず、ご後悔なさる時がまゐりますよ。』そして魔女は、王様の兩の肩に、香ひの良い油を塗りました。

すると、程無く、王様の兩方の肩に、小さな翼が生えてきました。この翼

は、お衣服の下にかくれてゐますので、外からは見る事が出來ませんでしたけれども、王様が、空高く飛んで行かうと思召す時には、一寸、指先で、この翼にさはりさへすれば、たちまち翼は、大鷲よりも速く自由に大空を飛んで行ける程の大きさになるのでした。そして、もう飛ぶのを止めやうとお考へになれば、又指先を翼に當てさへすれば、翼は、元のやうに小さくなるのです。

さあ、かうなると、王様は自由です。何處へでも彼處へでも飛んで行つてそしてあらゆる事を知つておしまひになりました。家來の者共は、一體どういふわけで、王様がかういろ〳〵な事をご存じなのか、さつぱり知りませんでした。なぜなら、王様は、いつも、ご自分の居室におゐでの時は扉を、固く締め切つて、誰にも、中へは這入らせませんでしたから。

王様は、次ぎ〳〵と續け樣に戰爭をなさいましたが、その度に、指輪と翼

のお蔭で、思ふがまゝに勝利を得る事が出來ました。然しあんまり何處へでも飛んで行つては姿を隱して、人々の胸の中を見透かしてばかりゐられたものですから、到頭、『世の中に、信用出來る人間は、一人もゐない』とお考へになる樣になりました。そして、一日々々と、氣むづかしい、恐い王樣になつて行きました。もう臣下の人々は、誰も王樣を慕はなくなりました。王樣はその事をもすつかり知つてゐられました。そこで王樣は、ご自身を慰める爲に、諸國を遍歷して、姿も心も美しい立派な一人の少女を探さう、そしてその少女を愛して、結婚したならば、屹度幸福になるだらうとお考へになりました。

王樣は、やはり姿をかくして、長い間、あちらこちらと、さまよひ歩きました。そして到る處で、又しても、人々の怖ろしい企みや祕密をお知りになりました。王樣は又、各國の王宮へもお出でになりました。そして、どの王

宮でも、嘘吐きの不親切な女達が、うはべ丈、さも忠實さうに粧つてゐるのをご覽になりました。次ぎに王樣は、貴族達の家庭をご覽になつて行きました。ところが其處でも失望するより外ありませんでした。こせ〳〵したものや、意地の惡いものや、馬鹿に威張り散らしてゐるものや、わざと奇妙な格好をしたがるものや、要するに、極くつまらない、人達ばかりの寄合でしたから。

最後に王樣は、一番身分の低い、百姓や、羊飼ひ等の家をご覽になりました。そしてとう〳〵たいへんに貧しい百姓の娘に、お心を惹かれました。その娘は、太陽の樣に美しくありましたが、その美しさの中には、何物にもかへがたいつゝましやかな色が浮んでゐました。ですが、もつと〳〵王樣を感心させたのは、娘の美しい『姿』よりも尙は美しい氣高い『心』でした。

近所近在の若い人々は、みんな、この美しい娘を見る事を名譽のやうに考

へ、そして、我こそは、この天女の樣な少女をお嫁さんにして、世界一の幸福者にならねばならないと、お互に力んでゐました。

アルファルート王は、この少女を王妃にしたいからといふことを、少女の父親にお話しになりました。貧しい百姓は、自分の娘が、立派な王妃にならうなどゝは、夢にも思つてゐませんでしたので、もうすつかり、有頂天になつて喜びました。

クラリフキーユ（といふのがその娘の名前でした。）は、お父樣の貧しい茅屋から、一足飛びに、目のさめるやうな宮殿の奥に住ふ身となつて、朝に夕に多勢の官女達に、かしづかれる事になりました。ですけれども、クラリフキーユは、自分の身が王妃となつて、ありつたけの榮華を盡せるやうになつてもなほ、その榮華に目を眩まされはしませんでした。そしてやはり、元の通りなつゝましさとすなほな心と氣高い氣品とを失なはないで、いつまでも、

自分が、何處に生れ、何處に育つた身であるかをちやんと心得てゐました。王樣のクラリフキーユに對する優しいお心は一日々々と募つてゆくばかりでした。そして到頭王樣は、政事向きの事まで、一切を、この賢い王妃にまかして了つたならば屹度未だ〳〵幸福な身になれるにちがひないとお考へになりました。がそれをするには、なほ今少し、王妃の心を試してみねばならぬと思召して、始終、例の指輪を使つて姿を隱し、王妃の動作や言葉を調べてみましたが。罌粟の種子程の疑はしさも發見けられませんでした。ですが王樣は、クラリフキーユの姿が、あんまり美し過ぎるのと、若しかすると、誰かにとられるやうな事はあるまいかといふ心配になやまされました。

お話が少し後へ返つて、王樣に例の指輪を呉れた魔女は、その後も時々宮殿に伺つては、王樣のお望に任せてやむをえず、差し上げた翼の事を云ひ出して、何か不吉な事が起らなければ良いがと、そればかり繰り返しました。

王様には、この魔女の繰り言がうるさくて〳〵たまりませんでしたので、到頭、魔女に、宮殿へ來てはいけないとお命じになり、王妃にも、もう魔女に會つてはならぬと仰言いました。王妃は、王様のお命令ですから、『はい、もう會ひません。』とはお答へしたものゝ、非常に悲しうございました。といふわけは、王妃が大變にこの魔女を好いてゐられたからです。

ある日魔女は、優しい王妃に會つて、未來の事をお敎へしやうと思ひましたので、早速、若い騎士（昔の武士）に姿を變へて、王妃の室へと這入つて行きました。そして王妃の耳に口を寄せて、自分が魔女である事をさゝやきました。王妃は非常に嬉しく思つて、優しく魔女の手を握つて、その親切を感謝しました。と恰度この時、アルファルート王は、姿をかくして、王妃の室に忍び込んでゐられたのでしたが、初め、王妃にさゝやいた魔女の言葉が聞えませんでしたので、これはてつきり、自分にかくれて、祕密に會つてゐ

王様の翼

る男にちがひないとお信じになりました。そして身體ぢうを、ぶる〳〵ふるはしてお怒りになりました。王様は、手早く劍を拔きはなつて、王妃の胸を刺し貫きました。王妃はすぐ王様の腕の中へ倒れかゝりました。この時魔女は、いちはやく自分のほんとうの姿を現しましたので、王様は、王妃の潔白な事をお知りになつて、『この上は。』と、劍をとりなほして、自殺しやうとなさいました。魔女は、その手を止て、色々と王様を慰めました。

王様の手の中に倒れたクラリフキーユは、絶え〳〵な呼吸のうちから、『このやうに、あなたのお手に抱かれて死にますことはわたくしの本望でございます。』とかすかに申しました。

アルフアルート王は、今こそ、魔女の忠告をお用ひにならないで、不當な望みを抱かれた事を、心の底から後悔なさいました。そして指輪は魔女に返しておしまひになつて、兩肩の翼もどうぞ除り去つて呉れるやうにとお賴み

になりました。

それから後の王様には、さびしい、悲しい日ばかりが續きました。

王様にはもう、クラリフキーユのお墓の前に行つて、涙ながらに、お祈りをするより外、慰めとなるべきものはありませんでした。

朝鮮人の娘

一

今日は皆さんに朝鮮人の娘さんのお話しをしませう。娘さんといつてもまだ小さいんですよ。十三四歳、多分皆さんと同じ位ゐの年配ぢやないかと思ひます。私はその娘さんの名前もよく知らないのです。何んでもお父さんの名が李といひますから、娘さんも多分李といふのだらうと思ひます。別に美しい顔といふのではありませんが、細面で怜悧さうな顔でそして動作は大變快活で、日本語が上手に出來ます。無論日本の小學校に通つしゐました。

この娘さんは小石川水道町の朝鮮飴屋の娘さんです。

飴屋さんの娘だといふと、そんなに可笑しいんですか？　何も可笑しいことがないぢやありませんか。

江戸川の終點で下りて矢來の交番の方へ向つて、一丁ほど行くと左側に娘さんの家がありました。後では店もだん〳〵立派になりましたけれども、初めの内はほんとうに、ちつぽけな店で、店の奥には電氣もついてゐない位ゐでした。

『飴をちやうだい。』

小さな子供等が店の前に立つと、白い朝鮮服を着た娘さんのお母さんが、白い血色の惡い顔をして出て來ます。

『飴いくらあげます。』

『五錢ちやうだい。』

といつて、子供が五錢の白銅をガラスの上にのつけて待つてゐると、娘さんのお母さんは朝鮮の唄をうたひながら、飴の數をかぞへ袋に入れて、

『ありがたう！』と妙に節をつけて、子供の手に渡してやります。

その頃は娘さんはまだ小さかつたのです。何んでも私の一番最初に娘さんを見たのは、七歳か八歳の頃で、お父さんに背負さつてゐたやうに思ひます。娘さんのお父さんは日本人と殆んど區別することの出來ないやうな顔で、髪を分けて色眼鏡をかけた少し肥つた男でした。

初めの内は朝鮮飴のことを餘り知らないので、誰も買つて食べる人はありませんでしたが、その内にぽつ〳〵子供等が買つて食べるやうになつたので、大人にも朝鮮飴の味がだん〳〵解つて來ました。夫から散歩に出る人は、誰でもおみやげに買つて歸るやうになりました。

あなた方は朝鮮飴を食べたことがありますか？　私は大好きで、よく買つて來ては、子供等と一緒に食べたものです。

『大人でも飴を食べますか？』

無論大人だつて、甘いものは好きです。朝鮮飴は日本飴に比べると色が白

くて柔いので口の中へ入れると、自然に溶けてしまひます。食べた味ひも幾らか異ひます。私は大好きです。

二

水道町の朝鮮飴屋の店はだん〳〵繁昌して行きました。初めは主人と主婦さんと、この娘さんだけで、偶に主婦さんの妹さんが手傳ひに來るだけでしたが、店が繁昌するにつれて、何處からとなく三四人、朝鮮人が集つて來て店を手傳ふやうになりました。

夕方になつて、電氣が明くつく頃になると、若い朝鮮人が、妙な歌をうたひながら、鍋の中から飴の煑たのをとり出して、それを柱にかけて伸しにかゝります。出來た飴は二人の男に渡されると二人の男は剪や小刀で、やはり歌をうたひながら、同じ長さの飴に切るのです。この飴を切る時の音とその時にうたふ歌が面白いので、町を通る人達はみんな店の前に立つて笑ひな

から見てゐます。それがまた評判になつて、遠いところからわざ〳〵朝鮮飴屋を見に來る人もありました。

朝鮮飴屋が繁昌するにつれて、朝鮮の娘さんも大きくなつて、近所の小學校へ通學するやうになりました。

私は、毎日私の家から神樂坂の邊まで散歩に行くのを樂しみにしてゐるので、よくこの店の前を通ります。ある晩この店の前を通ると、いつもの通り店の前に二三十人の人が立つて朝鮮人の歌をきいてゐました。中には朝鮮語の眞似をしてからかふ人もありました。朝鮮の青年達は熱いので、額に汗をびつしよりかいて仕事をしてゐました。

『かたん〳〵……かたん〳〵……』

といふ小刀や剪の音が絶えず店の中からきこえて來ます。私はいつでもこの朝鮮飴屋の元氣で賑やかなのが好きでした。

朝鮮人の娘

私はふと何氣なく右手を向くと、私の立つてゐる場所から二三間離れたところに、飴屋の娘さんが、近所の日本人の子供等と何かをして遊んでゐるのを見ました。私は娘さんの大きくなつてゐるのに驚きました。丈が高いので背後から見ると、まるで女學生のやうな感じがしました。

『何をして遊んでゐるのだらう？』

と私は心の中で考へながら、朝鮮の娘さんのゐる方へ行つて見ました。そこは、ミシンや刺繍を教へる店の前で、店の陳列窓には、紫色の縮緬に白で藤の花を刺繍したのが明い電氣に照されてゐました。その陳列窓のすぐ前のところで、朝鮮の娘さんは、三人の日本の娘さん達と遊んでゐました。

『こんな人通りの中で、子供等はよく遊び場所を見つけるものだ。』

と私は感心して、子供達の遊んでゐるのを見てゐたが、朝鮮の娘さんは他の子供達と上手な日本語できやつ〳〵と笑つたり騒いだりしてゐたが、お終

ひには遊び疲れたと見えて同じ場所に蹲居んで、何か一生懸命にお話しを初めました。

何百人、何千人といふ人の通るこの賑かな街の中で、かういふ子供等が餘念もなくお話してゐるのを見て、私は大變愉快に思ひました。私は何うかみんな仲よくして遊んでゐてくれゝばいゝと思ひながら牛込の方へ歩いて行きました。

三

ところが、ある時悲しいことが起りました。然し私はその事の起つた場所には居合はせなかつたから、確乎したことはお話出來ないけれども、とにかく事件の起つたことだけは事實です。

ある夏の夜でした。

私は散歩を終へて家へ歸りがけに、餘念もなく水道町の通を歩いて來まし

た。その時はもう十一時過ぎて、街で、そろそろ店を閉めかける頃でした。

一日一杯街の上に散らかつた。紙片や塵埃がところ〳〵に積重ねられて、車のついた塵埃箱を押した人足が街にぼんやり立つてゐました。

私はある大きな雜貨店の前の邊まで來ると、店の前に十五六人の人が立つて、何か高い聲で物を言つてゐるのを見ました。

『やつゝけろ〳〵！』

とある男がいふと、

『朝鮮飴、一人も殘さず撲殺してしまへ！』

と、もう一人の男が叫びました。そして其度毎に大勢の人間が『わあつ！』と喊聲を擧げました。

私はびつくりしました。そして、これはきつと朝鮮飴屋に關係のあることだといふことが解りました。私は傍に立つてゐた溫和しさうな店員に向つて、

『一體何うしたんですか？』

ときゝました。すると店員は眞面目な顏して、

『學生と朝鮮人が喧嘩をしたんです。』

と敎へてくれました。

『何うして喧嘩をしたんでせう。』

『何もしないのを朝鮮人が大勢來て、日本の學生を袋叩きにしたんださうです。』

と店員は、いかにもそれを信じてゐるやうな調子で言ひました。

私はそんな事が絕對にあることではないと信じてゐるので、店員に別れて朝鮮飴の店の方へ歩いて行きました。

途中でもう一人の人にきいて見ると、其人は笑ひながら、

『日本の學生が醉拂つて、朝鮮人をひやかしたのを怒つて、朝鮮人が大勢で

撲つたのです。すると日本の學生も大勢になつて、大喧嘩になつたのです、何しろ兩方とも酔拂つてゐますからね……』

と答へました。

『兩方とも酔拂つてゐましたか？　そして負傷しませんか？』

『雙方とも大負傷です。まるで戰爭でしたよ。日本人同志ぢや、あんな喧嘩はしませんや。』

と其人は嘆息するやうに言つて、行き過ぎてしまひました。

私はいそいで朝鮮飴屋の店のところへ來ると、店がぴつたり閉まつて戸の外には十五六人の日本人が立つて、

『家をぶつこわしてしまへ！』と叫んでゐました。

『馬鹿な氣毒な人達だなあ！』

と私は思ひながら、淋しい氣持で家へ歸りました。

そして其時も、あの無邪氣な朝鮮の娘さんのことを思ひ出しました……あの娘さんは今何處にゐるでせう？

對話　パラソル物語

幸子　十五歳
園子　友達
幸子の母
幸子の父

第一節

幸子と園子

郊外のやゝ大きな河に添ふた野原。
青い芝草の中に赤い紫雲英や黄金色の蒲公英が美しく咲き亂れて、紫色の遊絲が煙のやうに野を霞ませてゐる。廣い野のはてには遠く山脈が走つてゐる。
時は午後。

幸子と園子は樂しさうに話してゐる。二人の後には美しいパラソルが二人の話を聽いてでもゐるやうに開かれてゐる。

幸子。園子さん靜ですね。

園子。え。もう櫻が散つてしまうと誰もこんなところへは來なくなるのね。

幸子。ほんたうに人間といふものは薄情なものね。私は櫻の花の盛りの頃よりも今頃の季節が一番好き、あなたは何う思つて？

園子。私もよ。私は花の頃よりも新綠の方が好きなの。私の國の方では冬は長いから春の心持ははつきりするけれども、東京にゐると春の心持がほんたうに解らないわ。

幸子。それは然うかも知れないわね。あなたはこの夏お國へお歸りなすつて？

園子。え歸るわ。

幸子。お一人で？
園子。いえ、兄さんと。
幸子。然う。兄さんとお歸りなさるの？　羨しいわね？　兄さん、もう學校を卒業なすつて？
園子。え。去年。
幸子。私も夏休みに歸るやうなお國があるといゝと思つてよ。
園子。でも、幸子さんなぞ毎日お父さんやお母さんのお顏が見られるからいゝわ。
幸子。いゝえ、つまらないわ！　お國へ歸るのが嬉しいでせう？
園子。（眼を輝かして）え、それは嬉しいわ！
幸子。然うでせうね。お家の人も皆なお喜びでせうね？
園子。え。それに私の家には山鳩がゐて、私が歸ると鳴いて大變なのよ。ぽ

つ〳〵つて首を動かして私に挨拶するの、それや可笑しいのよ。
幸子。（眼を圓くして園子の方を見ながら）然う山鳩が園子さんを識つてるんでせうか？
園子。え。識つてゐますとも。識つてゐる人と識らない人とよく區別するのよ。あなたは山鳩といふもの見たことあつて？
幸子。いえ。
園子。山鳩といふもの能く鳴くものなの。長い間面白い聲で鳴いてゐるわ。私の家のお父さん鳩が大好きなの。
幸子。園子さんのお國まで汽車で何時間かゝつて？
園子。二十四時間ばかりかゝるの。
幸子。二十四時間？　一晝夜も汽車に乘つてゐたら飽きるでせうね？
園子。え、隨分飽きてよ。でも、だん〳〵自分の生れた國の方へ近づいて行

くのだと思へば嬉しくて嬉しくて仕様がないの。停車場停車場で乘つて來る人の言葉もだん〳〵聞き慣れた言葉になつて來るでせう。ほんたうに涙の出るほど嬉しくなるのよ。

幸子。（嬉しげに）まあ！　自分の故郷といふものはそんなに嬉しいものなんでせうか？　園子さん、私達東京で育つた者にはその故郷といふ心持が何うしても解らないのよ。それは考へれば考へられないこともないけれどもたゞ想像して見るだけのことよ。

園子。然うでせうか？

幸子。ほんたうに美しいわ！

（この時、郊外を走る汽車の汽笛の音がする。二人暫く無言のまゝ其方に目を向ける。）

こんなところで汽車の音を聞くのはいい心持ね！　園子さん、私も旅をしたくなつてよ。

園子。（半ば立上りながら）あの汽車は所澤の方へ行く汽車よ。

幸子。然うでせう。あゝ、もう森の中に隱れてしまつた。でも煙だけが森の中から出てるわ。まあ空がよく澄んでゐること。飛行機でも飛びさうな日ね。

園子。私は東京の郊外でもこの邊は一番好きなのよ。私は東京へ來て、まだお友達の出來ない内、日曜日にはきつとこの河のところへ來たものよ。その頃は國の事が思ひ出されて、私いつでも泣いてたわ！

幸子。まあ！（間を置いて）紫雲英がまだこんなに咲いてるわ。

園子。蒲公英もあつてよ。クローバアを採つて行かないこと？

幸子。クローバアを採つて行きませう。コップに水を入れてクローバアを差して置きませう。

園子。この邊のクローバア柔かで色がいいこと！

（二人は立ち上りながらクローバアの莖を摘み取る。美しいパラソルは柔かな風に輕く動いてゐる。）

幸子。園子さん、奇麗ですこと！　この花何といふ花でせう？

園子。まあ奇麗！　紫色をしたこんな小さな花！

幸子。ベコニアの花と似てゐるわ。きつといゝ名があるに違ひないわ！

園子。ほんたうに珍らしい花ね！

幸子。持つて行つて標本にしませうよ。

（二人は無心で小さな花を見てゐる。この時、間に置きすてられたパラソルは風にあふられて飛んで行く。）

園子。幸子さん、大變！　パラソルが飛んで行く！

幸子。あら、何うしたらいゝでせう！　あゝ土堤から落つこちるところだわ！

（二人はパラソルを追ひながら土堤の上に登る。パラソルは河の中に落ちる。）

園子。あゝ！

幸子。あゝ！

（二人は河の流に添うて、パラソルを追ひながら下る。）

第二節

父と母、幸子。

幸子の家の居間。

母。幸子は何うしたのでせう？

父。大丈夫だ。今に歸るよ。

母。でも餘り遲すぎるぢやありませんか？　私心配になつて來ましたよ。

父。別に遠い所へ行つたといふでもなし、それにまだこんなに明るいぢやないか。子供のことを餘り心配するのは子供のために却つてよくないんだよ

母。でも私は何んだか氣になつてしやうがないんですの。

父。まあいゝよ。氣を落ちつけて待つておいで。

（父は讀書してゐる。母は不安さうに外の物音に耳を傾けてゐる。この時門の鈴の音がする。父も母も同時に其方に顏を向ける。やがて人の足音がする。）

母。（立上り）幸子か？

幸子。（力なく室の中に入る）只今。

母。幸さん、大變遲いぢやないの？　何うした？　おや、お前は泣いたね。あゝきつと何うかしたんだよ。これ何うしたの？　なぜぼんやりしてゐるの？

父。落ちついて聞いたらいゝぢやないか。お前さんのやうに然う迫き込んで物をいふと何うしていゝか解らなくなる。

母。いえ、きつと祿なことをして來ないんです。今日は何ういふ譯か幸子をやるのがいやだつたんです。幸さん、一體何うしたの？　何うして泣いた

の？

幸子。（急に母の膝に泣倒れながら）お母さん！　私、私、パラソルを失くしてしまつたの！

母。まあ！　パラソルを失くしたつて？　何うして、何處で失くしたの？

幸子。私、私、園子さんと河岸で話をしてゐる時風が吹いて來てパラソルが河の中に吹き飛ばされてしまつたの……私何うしたらいゝでせうね？

母。まあ！　この子は呆きれて物がいへないよ。七歳八歳の子供ぢやあるまいし、風の吹いてゐる時傘を河端へ置く者があるもんですか？　そして何うしたの、誰も取つて呉れなかつたの？

幸子。でも、其近所には誰もゐないんですもの。

母。あゝ、この子は何んといふ馬鹿だらうね！

幸子。お母さん、私ほんたうに惡かつたの堪忍して頂戴。

母。堪忍するもしないもないけれども、幸子もうお前には何も買つてやれないよ。あのパラソルは買つたばかりのぢやないか、あの運動會の時差したつきり祿に差しもしないで失くしてしまうなんてほんたうに情なくなるね！

幸子。ご免なさい、お母さん！

母。それに、お前、あのパラソルは安いものぢやないんですよ。お母さんの傘よりも倍も高いんですよ。子供には勿體ないつてお父さんが仰有るのを私のお金を足して買つてあげたんぢやないの。お前には物の勿體ないといふことが解らないんですか？

幸子。（涙を流しながら）お母さん、今度からほんたうに氣をつけますから、堪忍して頂戴。

父。もういゝ加減にしてよさないか。

母。でも、何うして家の子はかうぼんやりなんでせうね！

父。そんなことは何うでもいゝさ。

母。まあ！　何うでもいゝんですつて？

父。幸子。お前は今日何處まで行つて來たの？

幸子。目白の方から赤羽の方まで歩いて行つて來ました。

父。面白かつたか？

幸子。え、でも……

父。初めは面白かつたけれども、パラソルを失くしてから、急に悲しくなつたんだらう？

母。戯談をいつてる時ぢやないぢやありませんか。

父。まあ、默つておいで。幸子あの邊はいゝところだね。お父さんもよく書生時代にあの邊を歩いたもんだよ。つまりあの邊は武藏野の入口なんだね

お前は國木田獨歩といふ人の書いた『武藏野』を讀んだことがあるか？

幸子。いえ。名前だけは聞いたことがありますけれども讀んだことはありません。

父。然う。そんならお父さんのとこにあるから晩に讀んでご覽なさい。あれをよく讀んでそれからもう一遍遊びに行つてご覽、きつと面白味が違うから。

母。あんな呑氣なことをいつてるよ。

父。幸子、お前は今日一日運動したからきつと御飯がお甘いよ。今晩きつとよく眠れるに違ひない。然しパラソルを河へ落したのはやつぱりお前の不注意だね。あんなところへいゝパラソルなんか差して行くもんぢやないよ。去年のパラソルでも何んでもいゝ。パラソルがなければ頬冠りして歩いてもいゝ。パラソルを差して田を植ゑたり草を刈つたりする人はないだら

う？　世の中にはバラソルが欲しくても何うしても買へないでゐる人が何千人何萬人てあるんだよ。バラソルを失くすれば口惜いのは當前さ、然しお前は今日新しいバラソルを失くしたお蔭でバラソルのない人の心持が解つたのだ！　御飯を、、、、、つさり食べて、安心してお寢み！

（幸子は初めて涙の中から微笑す。）

賢者アリベの話

昔、ペルシャの國に、サシャ・アッバといふ王様がありました。

ある時王様は、自分の人民達の少しも取りつくろはない、ありのまゝの生活振を御覽になりたいと思ひたち、人に知れないやうに、お忍びで旅をなさることになりました。王様は御家來の内からたつた一人だけを選でお供につれてお出でになりました。そして、その御家來に、

『余は人々のほんとうの生活方が何んなものだか少しも知らないのだ。余の近くにあるものは、すべて虚僞りの假面を被つてゐるものばかりだ。余の目にとまるものはすべて表面だけで、少しもほんとうの姿を見せてくれない。余は田舍者の生活を學んで見たいと思ふ。そして實際人間の生活の柱になつてゐる人間達が、とかく人々に蔑すまれてゐるが、さういふ人達の

性質を調べて見たいのだ。余はもう、余の機嫌ばかりとつてゐるやうな家來共には飽き〳〵した。余はまだ逢つたことのない百姓や、羊飼ひを見に行かなければならない。』

と仰言ひました。

そこで、王樣は家來と二人で幾つも村を通つておいでになると、或る村では、村の人達が皆な集つて踊り狂つてゐました。王樣は王宮を遠く離れた所に、こんな立派な、然し極く質素な樂みのあるのを御覽になつて、大變にお慰みになりました。やがて王樣はある一軒の茅屋に這入つてお食事をなさいました。そしていつになく、道をお歩きになりましたので、お腹が空いてまづい食物も大變おいしく召上れました。それから、王樣はある花の咲き亂れた野原に出られました。そこには澄みきつた小川がさら〳〵と流れてゐました。その川邊のある大きな楡の樹の蔭で一人の若い羊飼ひが、草を食べて

ゐる羊の群の番をしながら笛を吹いて遊んでゐました。王樣は若者に近附いて、つく〳〵とその姿を御覽になりまして、そして愉快な顏付と無邪氣な姿の中に何處となく氣高い優しさのあるのに眼をおつけになりました。きたない破れ着物を着てゐました。けれども羊飼の美しさは失はれませんでした。

王樣は初め、この若者は、きつと身分のある人の子供で、何にか譯があつて姿を扮して羊飼になつてゐるのだらうとお考へになりました。然し若者に聞いて見ると、それは間違ひで、若者の名はアリベと言つて、兩親共、つい近所に住つてゐる田舍者だといふことが解りました。そして、色々お話をなさるにつれて、若者のしつかりした心懸と賢い答へにすつかり感心しておしまひになりました。

活々と輝いた若者の兩眼には荒々しい野蠻なところもなく、その口から洩れる聲は滑かで、人の魂に深く食入つて行くやうな快さを持つてゐまし

た。顔もまた美しいけれども女々しくなく、整つた形をしてゐました。然し若者は自分の美しいといふことも、また人に何んな感じを與へるかといふことも知らずに、普通の羊飼ひと同じやうに話し、同じやうに暮してゐるのだと信じてゐます。

この若者は羊飼の事ですから、一度も教育を受けたことがないのに拘らず一度聞いたことは決して忘れません。王様はこの若者に、この村の人々は王様のことを何う考へてゐるか精しく聞くことが出來ました。若者は問はるゝまゝに色々な事を話しながら、時々無邪氣に聲をたてゝ笑ひました。然し王様は自分が王様だといふことを知らせないやうに、家來に眼くばせをしました。そして家來に向つて仰言いました。

『余は、身分の極く低いものゝ中に、却つて身分の高い者よりも美しい生活のあるものだといふことを良く知ることが出來た。……もし注意してこの

賢者アリベの話

若者を敎育したならば、他日きつと偉い人間になるだらう。余はこの若者を王宮へつれて行つて育てゝ見たいと思ふ。』

そして王樣は初めて自分の王樣だといふことをお告げになりました。それを聞いて若者は大變に驚きました。

さて王樣は、若者アリベをつれて、王宮にお歸りになりました。アリベは王宮で、書物を讀むことや、字を書くことを敎はりました。それから立派な敎師について繪畫や文章や、其他地理歷史の類まで敎はりました。

初め、アリベは王宮のあまり立派なのに目を眩まされましたが、運命の大きな變化はアリベの心にも大きな變化を與へました。そして王樣の寵愛を一身に受けた彼は、未だ年若い少年のことでしたから、つい、知らず〳〵の間に、つゝましい性質をだん〳〵無くして行きました。羊飼の杖（杖の先きに杓子のやうに曲げた鐵板のついたもの）や、笛や、破れた衣服をぬぎすてゝ

黃金の刺繡をした緋布の衣服をまとひ、寶石をちりばめた帽子を冠つて、御殿中で第一の美男子になつてしまひました。年月の經つにつれてアリベは可なり重い職務も果せるやうになつて來まして、王樣はアリベの高尙な趣味をよく知つてゐられたので、ペルシャの國でも一番重要な、寶玉や寶物の類を監視する役目を仰せつけられました。アリベは、こんな名譽ある身分になつても、昔の事がなつかしく思はれました。

『あゝ美しかつた日よ！』と、昔の無邪氣な羊飼の生活を思ひ出しました。

『あの頃は自分の心も淸らかで、安心で何の苦勞もなかつた。王宮の人になつてからといふものは、自分は一日だつて、あのやうな樂しい心持ちになつたことがない。少年時代の魂よ！　私はもう再びそなたに會ふことが出來ない！』といつて嘆き悲しみました。

アリベは餘り故郷の懷かしさに、ある時自分の故郷の方へ旅をして、親類

や友達に會つて、みんなに幾らかづゝのお金を與へ、人間の幸福といふものは富貴にあるのではない、『どうぞ田舍の幸福な生活をすてないやうに』と願ひました。ところが、その内にアリベを寵愛された、ベルシャの名君サシャ・アッバ王は御病氣のためにお亡くなりになりました。そして王子のサシャ・セフキが御位にお卽きになりました。すると、今までアリベの出世を猜み憎んでゐた家來達は、何うかしてアリベを陷れようとして、新しい王樣に向つて『アリベは先王樣の御寵愛をいゝことにして、監視の寶物をかすめて不正な富を蓄へて居ります』と申上げました。新王のサシャ・セフキは先王の孫に當る方で、未だ十七歳の若い人でしたから、うつかり惡い家來の言ふことを信じてアリベの役目をやめさせようとお思ひなつて、

『先王が戰爭の時に持つて行かれた劍を持つて來て見せろ。』とお命じになりました。この劍は三日月形になつたもので、鞘にも柄にも一面にダイヤモン

ドをちりばめたものでありましたが、先王の時にそのダイヤモンドを拔きとつてしまはれたものでした。惡い家來どもはそのダイヤモンドはアリベの盜んだものだと王樣に思はせようとしたのでした。アリベは新王の命令によつて早速その劍を持つて來て、すぐそれと同時にこのダイヤモンドは先王の拔き取られたもので、その時はアリベも立會つたことを申上げて、立派な證據をお見せしたので、王樣の疑ひも解けてしまひました。惡い家來は今度は第二の惡計を考へました。王樣はアリベに命じて、『余はぢき〳〵に寶物を檢分するによつて、十五日の間に寶物の全部を陳列いたして置け。』とお命じになりました。アリベは王樣の命令のまゝに、殘らず、寶物を順序よく陳列しました。王樣は目錄を手にして一々品物と較べて見ましたが、一點の相違もなく品物が揃つてゐました。そしておまけに皆なよく手入れが屆いてゐました王樣はそれを見て幾らか見當がちがつたやうな心持がされました。すると其

時惡い家來が王樣に囁きました。あの廻廊の突當りの錠前をかけた鐵の扉が怪しうございます。アリベは盜んだ品物をあの中に匿して置くのでございます。』すると、王樣は大變に怒つて叫びました。

『アリベ！　余はあの扉の彼方が見たいのだ？　何を彼處に置いてあるんだ？　すぐに開けて見せろ！』この言葉を聞いてアリベは、直ちに跪いて神に祈りをあげました。地上にあるすべてのものゝ內で、あすこにあるものほど私に大事なものはありません、あれだけは何うか私の傍に置かせてくださいませ！』すると王樣は、これは、てつきりアリベが惡いことをしてゐるに相違がないとお思ひになつたので、『直ぐに開けろ！』とお叫びになりました。アリベは仕方がなく鍵を取り出して、重い扉を開けました。

中から何が出て來たでせう？　それはたゞ汚い羊飼ひの衣服と笛と羊を追ふ杖だけでありました。いふまでもなく、アリベは『昔の自分』を忘れない

ために、度々この扉を開いては昔の記念品を見て、自分の日常の行爲を反省してゐたのでした。アリベは三つの品物を指しながら王樣に申上げました。

『王樣よ、何うぞこれを御覽くださいませ、これは私の少年時代の貴い記念物でございます。これだけは、何んなお金を持つて來ても、何んな偉い方がお命じになつても、私の手許から離すことは出來ません。この三つの寶物は、私を助け幸福に導いてくれてゐます。常に正直な純潔な優しい相談相手になつてくれてゐます。あゝ、單純な幸福な生活の貴い器よ！　私は唯お前だけを愛する！……王樣よ、私はこの宮殿ではあらゆる御寵愛を受けました、然し今となつては唯だ私に不幸を與へるに過ぎない財寶なのです……私は先王に初めてお目にかゝつた時のあの姿にかへりたいと思ひます。』

セフキ王はアリベの話をすつかりお聞きになつて、彼の純潔無垢なことを知ることが出來ました。そして、この潔白なアルベを猜んで惡計をめぐらし

た家來共をお傍から遠去けてしまはれました。アリベは一層王様の信任を得て、ペルシヤ最高の位にまで登りましたが、やはり毎日鐵の扉を開いて杖と笛と破れた衣服とを眺めて、永久に變らない幸福のことを思ひ現在の華やかな位置を決して信ずるに足る運命ではないことを考へるのでした。アリベは非常に長生をして死にました。アリベは生涯その敵を憎みもせず、親類の人達にはたゞ羊飼ひとして生きて行くだけの金を殘してやつて死んだのです。

――死ぬ時まで、彼は華やかな宮殿の生活よりも貧しい牧人の生活が最も危つ氣のない、最も幸福な生活であることを信じてゐたのでした。

飛行機

對話

父　（三十五六歳）
母　（三十歳位）
娘　（九　歳）

東京山の手の新開地に建てられた小さな二階建の一間。正面のガラス戸をとほして廣い空が見える。左手に階段の欄干だけ見られる。

父はテイブルに腰かけて讀書してゐる。母は其側で裁縫をしてゐる。

父。（讀書しながら。）今日は寒いけれども、いゝお天氣だね。

母。　え、ほんたうにいゝお天氣ですわね。

父。　お祖母さんはまだ歸らないやうだね。

母。　え。まだ歸りません。音羽まで行つていたゞいたんですから。

父。何を買ひに行つたの？

母。晩のお菜を買ひに行きましたの。

父。然うか？　お祖母さん、此節は丈夫で結構だね。

母。え、。ほんたうですね。愛子の死んだ頃はがつかりして、病氣になりはしないかと心配したけれども、此節のやうだと安心ですわ。

父。然し、なるたけお祖母さんは使ひなぞに歩いてもらはないやうにしやうぢやないか。

母。ほんたうに、然うしませうね。

（父は再び讀書をする。）

父。おや、常子は何處へ行つたらう？　先刻まで、下で遊んでゐたやうであつたが。

母。原でせう？　野口さんと一緒のやうでしたから。

父。あの子は愛子が死んでから、大變快活になつたやうだね。

母。然うですね。妙なもんですのね。愛子はよくふざける子でしたね。

父。然うだ。姉さんがよく泣かされたもんだつけな。

母。姉妹まるであべこべでしたね。常子の方は幼い時から無口でしたね。それが、近頃のおしやべりになつたことは何うです？

父。然うだね。まるで性質が一變したやうだね。

（父はテイブルのところから伸びあがつて原の方を見る。）

あゝゐた！　あんなところに、一人て遊んでゐる。

母。然う？　一人ですか？

父。あゝ、たつた一人で銀杏の葉を集めて遊んでゐる。

母。然う。それぢや野口さん歸つたんでせう。

父。あの子も大きくなつたね。後から見ると、大きな娘のやうに見えるよ。

妙なもんだね、あれ位になると、大きくなつて娘になつた頃の姿を想像することが出來るもんだね。何んな女學生になるだらうね。

母。（輕く笑ふ。）まあ。女學生ですつて！

父。（再びテイブルに腰かける。）何んな娘になるか知ら？

父。自分の子供ですけれども、あんまり惡い子ぢやないと思ひますわ。

父。私も然う思ふよ。

（父も母も數分間何もいはずに、自分の娘のことに就いて、色々に行末の事などを考へてゐる。）

（遠く飛行機のプロペラの音がする。）

父。おや、飛行機ぢやないか？

母。さう。飛行機のやうですね。

父。あゝ、あの女の飛行家のだらう。見えるかしら？

（父はガラス戸を明ける。突然叫ぶ）

あゝ見える！　あの並樹の上に！

娘の聲。（下の方から呼ぶ。）　お父さん！　飛行機が見える？

父。　あゝよく見える。二階からよく見える！　さあ、早く來てご覽。

母。　常ちやん、おいで！（父に）あの邊が青山になりませうか？

父。　然うらしいね。女で偉いもんだね。

母。　まだ若い娘ですつてね。

父。　然う。十九とか二十歳とかださうだ。西洋人の冒險心といふものは日本人なぞの考へる冒險心なぞとは性質がちがふやうだね。

（この時、娘の常子が階段を上つて來る。）

娘。　お父さん見えて？

父。　こゝへおいで、よく見えるよ。

母。　そら、あの樹の上の所をご覽。

父。　見えるだらう？

娘。　まあ！　よく見えるわ！

父。　そら、煙を二本出したぞ、これから宙返りが初まるんだ。

娘。　お父さん、あの煙が蛇のやうだわね。

父。　そら、下へ下りた、横になつた、また上にのぼつて行くところだ……

（三人は暫く無言で飛行機を見てゐる。）

娘。　あゝ、きら〳〵光つてるわ！

母。　おや、何うしたんでせう？

父。　なに、わざとあゝいふことをするんだよ。

娘。　あら〳〵、お父さん、おつこちるんぢやないの？

父。　大丈夫！　あれは『直下』といつて、あれですぐに降りるんだらう。あゝ、もう見えなくなつた。

娘。あゝ、もう見えないのね。

（父と母と室の中に戻る。）

父。常ちやん、もう寒いから遊びに行かないで、お復習をなさい。

母。毎日學校から歸ると、すぐ遊びに出るのね。教はつたところをお復習ひしてからでなければ、遊びに出るもんぢやありませんよ。

娘。え。お母さん、私、飛行機を見てゐる時、もう少しで『愛子ちやん！』といはふとしたわ！　可笑しいわね！

（かういひながら室の右手の窓の下の自分の机に向ふ。）

父。（小聲でいふ）おや、お前はまた泣いてゐるね？　もう泣くのは廢して呉れ。

私はもう泣くのは飽きた。

母。（裁縫の手をやめてやはり小聲に）でも、私は何うしても、あの子のことが忘れられないんですの。何うして、まあ、あなたのやうな心持になられるでせう

父。（元氣をつけるやうに。）泣いたつて、あの子は歸つて來やしないよ。

母。それは然うですわ。でも、それはやつぱり理窟ぢやないでせうか？

父。いや、僕のは理窟ではない。僕のは信仰だ。

母。（少し笑ひながら、）でも、信仰といふものはそんなものでせうか？　信仰といふものは人間の感情を冷くすることでせうか？

父。いや然うぢやないさ。

母。然うでせう。私はあの子が死んでから、ほんたうに人間の不幸といふものが解つて來たやうな氣がしますの。

父。私もやつぱり然うだ。

母。私は人間の涙といふものゝ、ほんたうの味が解つたやうな氣がしますの

父。それはいゝことだと私も思ふよ。

母。『いゝことだと思ふよ。』なんて、何うして然うすましてゐられるでせう？

父。何もすましてゐるのではないさ。僕は只お前のやうに涙を流さないばかりの話さ。また僕は愛子は死んだけれども、あの子はほんたうに死んだのではないと思つてゐるから、たゞお前のやうに泣いてばかりゐることは出來ないんだ。愛子は生きてゐるんだ、さうだ、愛子がほんたうに生きてゐるんだ！

母。愛子はほんたうに生きてゐるのでせうか？

父。愛子はちやんと生きてゐる。

母。この間の方もそんなことを仰有いましたけれども、私には何うしてもそんな氣持にはなれませんわ！

父。それはつまり、お前がほんたうに愛子を愛してゐないからさ。

母。私は愛子をほんたうに愛してゐないからですつて？　何うしてゞせう？

父。愛子といふ人間の形だけしかお前が思つてゐないからさ。私も初めの内

はやつぱりお前と同じやうに考へてゐたが、その時はやつぱりお前のやうに毎日泣いてばつかりゐた。

母。それぢや。愛子は何處に生きてゐるのでせう？

父。（靜かに、）お前の胸の中にさ。それから私の胸の中にも、お祖母の胸の中にも生きてゐるんだ。（常子の方へ行つて、常子を懷き上げる。）それよりも、この常子の身體の中にあの子の魂がちやんとはいつてゐるんだ。

母。（常子を父の手から受け取り、常子の目を靜かに見つめてゐる。目から涙がにじみ出る。）常子、常ちやんは、今日から愛子ちやんになるんですよ！

娘。お母さん、可笑しいわ。私は常子よ。愛ちやんはもうゐないわよ！

母。（涙ぐむ。）

父。だから、常ちやんは、愛子ちやんの代りにお母さんを可愛がらなければ

ならないんだよ。

母。常ちやんは春からは二人分いゝ子になつて、二人分勉強して、二人分立派な人になるのよ！　解つて？

娘。（母の顏を見ながら嬉しげに、）え！

（母は娘を强く懷き寄せる。）

（三人は暫く心地のいゝ無言の中にゐる。）

旅人と提灯

むかし津輕といふ國と南部といふ國とが領分のことで長い間戰爭をしてゐました。戰爭が終へたかと思ふとまたすぐに戰爭が始りました。春に戰爭が終へると秋にはきつと新しい戰爭があるといふほどでした。

然しいつまで經つても領分の決定つたといふことがありません。領分が決定らないばかりでなく、戰爭をする度毎に何百人何千人といふ立派な人間が死んで行きます、そしておまけに澤山の軍費が要するので、それがみんな百姓の頭に割當てられて來るので百姓はいつまでも貧乏でした。

そこで國境の百姓供は相談をして津輕の娘を南部に嫁にやり、南部の息子を津輕の婿にもらつたら、お互に仲が好くなつて喧嘩をしないやうになるだらうと言ひ出しました。この意見には皆な同意をしました。そこで國境の村

々では急に祝儀が殖えました。津輕の娘は奇麗にお化粧をして、南部津輕の峠を越えて知らない土地へ、お嫁に行きました。南部の息子は津輕南部の峠を越えて知らない土地へお婿さんに行ました。嫁さんも婿さんも初めの内は何となく心配でしたけれども、慣れて見ると人情に變りのないことを知つて、皆なよく働きました。

南部の息子は南部の婿さんになるより、津輕の婿さんになるのを喜びました、そして津輕の娘は津輕の嫁さんになるより南部の嫁さんになるのを喜びました。

『なんて魂消た話だ！』

と村の年寄達は眼を圓くして驚きました。それも其筈です、南部の年寄達の頭には津輕の男は熊か狼のやうに思はれてゐたし、津輕の年寄達には南部の娘は肋骨の一本足りない人間だと思はれてゐたのですから。

津輕と南部が戰爭をしなくなつたので百姓達は大喜びでした。然し戰爭で勳功を立てることを職業にしてゐた武士は困つてしまひました。そして殿樣は大變暇なお身上になりました。

かういふことのあつてから間もない頃のことでした。津輕の方の山の麓に一軒の茶屋がありました。夫婦に二人の娘がありましたが、上の娘はおきよといつて村でも評判の娘でありました。夫婦の者はこの娘を此上もなく可愛がつて大きくなつたら、いゝ婿さんをもらつて家を繼がせやうと、たゞそればかりを樂みにしてゐました。娘は遠慮なく大きくなりました。村の物持の家で息子のお嫁に欲しいと再三人をよこして頼んで見たけれども、親父は娘は婿取だからといつて斷りました。

『それに、まだほんとに子供ですから。』

と母親は遠慮らしくいひ足しました。

娘は身體の少し小造りな女でしたけれども、目鼻立ちのはつきりした、この邊ではとても見へられないほどの女でした。それにこの娘は大變にいゝ聲で盆踊の時、この娘が歌ひ出すと、誰れも歌ひつゞけるものがなくなるほどでした。村の若衆達はこの娘を見るために毎日夕方になると茶屋の小店に集つて來ました。然し娘は別に若衆達とふざけるやうなこともなく、いつもにこ〳〵して柱に寄りかゝつて往來を眺めてゐました。往來のすぐ前は大きな山になつてゐて、山から流れて來る水を樋にして、水壺には桔梗や女郎花などが四五本投げ込まれてゐたりしました。

ところが、ある秋の末、盆の踊の終へた頃、この娘は突然姿を隱してしまひました。夫婦は氣狂ひのやうになつて娘の行きさうな内を探して歩きましたけれども何處にもゐませんでした。亭主は、ちやうど子犬を隱された親犬

のやうに何んな物蔭でも覗いて歩きました。山の上へ上つては、娘の名を呼びつゞけました。やつぱり娘は何處にもゐませんでした。

然し二十日ばかり經つて南部の鑛山から來た若い工夫の言葉で娘の在所が初めて解りました。娘は山を越えた南部の村で若い南部の男と一緒になつて家を持つてゐるといふことでありました。

舊弊な娘の親父は腰を拔かさぬばかりに驚きました。そして母親にいひました。

『あんな子供を賺してつれて行くなんて餘程太い奴だ。昔から南部の男は肋骨が一枚足りないといつたのはほんとうのことだ。早速庄屋殿にお願ひして取返へして見せるから。』

『でも、娘さへ仕合はせなら私は仕方がないと思ふよ。何しろかうした馬鹿氣きつた時世だからね、お爺さん。』

と母親は亭主を宥めるやうにいひました。亭主は一旦怒つては見たものゝ、心の中ではたゞ娘が仕合はせでゐて呉れゝばいゝといふ希望のほか別に深い考へがなかつたのでした。

『それも然うだ、幾等南部の奴等でも娘を食はせないで置筈はなからうから』と亭主は幾らか安心したやうにいひました。

すると間もなく娘のところから、手紙が來ました。その手紙によると、娘は大變に親切にされてゐることや、若い亭主と二人で大きな畑を耕してゐることや、その畑の中に大きな梨木があつて、澤山に梨がなつてゐるから送つてあげるといふことなぞも書いてありました。

親父がその手紙を母親に讀んできかせると、母親は默つて、涙を流してゐました。

『渡る世間に鬼がないと、よくいつたものだ。』

旅人と提灯